

## 第9章

# 仏領西アフリカの記憶

——ダン語およびフランス語によるインタビュー記録——

「父の話で一番楽しかったのは、東アフリカでの布教活動や、暴動を起こした原住民との戦闘のさま、それに、彼らの暮らしぶりや、その暗黒の偶像礼拝のこと、などだった。また、伝道会の福音と教化の活動のことを話してくれるときなど、私は、本当に熱い感動の心で、聞きほれたものだった」

(ヘス [1972: 5])

「懲罰／…／K.K. (氏名)／…／K村在住／オヨソ28歳／職業：耕作人／禁固15日／…／地区長官ヨリ賦役義務ヲ有スル家族員ノ全情報ヲ供ス旨勸告サレシガ申告員数ニ欠落有り。耕作用仮小屋ニ身ヲ隠スベク家族数名ニ命ゼシ所、其ノ者等ノ身柄、現場ニテ発見サレリ／ダナネ／1936年6月20日／地区長官(署名)」

(ANCI EE9234, No.3)

解題——植民地の記憶と人類学

植民地とその統治をめぐるダン語基本語彙

インタビュー記録

### 1. 平定作戦期

101. 初期の白人観 I

102. 初期の白人観 II

103. 平定軍の侵入 I

104. 平定軍の侵入 II

105. 銃の徴収 I

106. 銃の徴収 II

107. 銃の徴収III
108. リベリア逃亡 I
109. リベリア逃亡 II
110. 接合統治の模索
111. カントン長の任命 I
112. カントン長の任命 II
113. カントン長の任命 III
114. 小村の破壊
2. 両大戦間期
201. カントン長と司令官 I
202. カントン長と司令官 II
203. カントン長の権力 I
204. カントン長の権力 II
205. 犠牲となる女性 I
206. 犠牲となる女性 II
207. 強制労働の回避
208. 技芸の消滅
209. 村落権力の変遷 I
210. 村落権力の変遷 II
211. 村落権力の変遷 III
212. 村落権力の変遷 IV
213. 行政機構の再編
214. 首長家の形成
215. 秘書職の出現 I
216. 秘書職の出現 II
3. 脱植民地期
301. ヴィシー政権下の自殺 I
302. ヴィシー政権下の自殺 II
303. ヴィシー政権下の自殺 III
304. 教育エリートの萌芽
305. RDAの進出
306. 戦後の労働と徴兵 I
307. 戦後の労働と徴兵 II
308. 首長罷免事件
309. カントン長選挙 I
310. カントン長選挙 II
- 付録
1. 略年表
2. 象牙海岸マン地方の平定作戦進行図  
(1908~1915年)
3. ダナネ地区南部3カントンにおける  
カントン長の系譜
4. 象牙海岸マン管区ダナネ地区長官一覧
5. 象牙海岸植民地総督一覧
- 引用資料

## 解題——植民地の記憶と人類学

以下に訳出したテキストは、コートディヴォワール共和国ダナネ県南部在住のダン語 (Dan) 話者14名の方々 (章末引用資料 I 参照) が、仏領西アフリカ統治期 (1895~1960年) のさまざまな事件や経験について語った個人の記憶、ないしは集合的記憶—植民地伝承—の断片群である<sup>(1)</sup>。

大小あわせて40をかぞえるこれらのテキストは、かならずしも植民地を主たる話題としない筆者とのインタビュー (1988~94年) に際し、フランス語もしくは口承言語ダン語の語りとして表明された。その大半はインタビュー後の録音テープの内容を転写のうえ、筆者の責任で編集したものである。インタビューに御高齢でのごまされた方々のうち、幾人かはすでに祖先のもとへと旅立たれてしまった。そうした方々により—ときには自己の経験として—語られた記憶の内容が、強制労働に駆りだされた児童や、父母の身体への暴力を眼前で目撃した児童、銃の供出に際して拷問された男性、人頭税未納のため身売りされた女性、重責におしつぶされ自殺した行政首長など、およそ暗澹たる結末をともなうことは、これを編集した筆者の恣意に因るものといいがたい。またその「声」と記憶と死それ自体さえをも前にして、「なぜ」の問いをさし向けつつアカデミズムの流儀でひとつひとつのテキストの内容を足ばやに解明=決算しようという意図とも、本稿は無縁のところにある。しばしば20世紀最大の惨劇と評されるあのホロコーストの記憶と同等の次元で、端的にいつて「ここにはなぜはない」からである (フォルジュ [2000: 196-210])。「なぜ」を出発点とするアカデミズムの問い、とりわけ出発点としての「人類学的な問い」は、ここにはない。一個人の記憶の深奥にまで焼きつけられた「この世がこの世であることをやめる場所」(ヴィルコムルスキー [1997: 109]) に、人類学の特権的な説明概念としての「文化」は、ない。

その点、20世紀の西欧に出現したファシズムと、同時代の非西洋世界で展

開した植民地帝国主義とのあいだに類縁性ないしは連続性をみいだす視点が、アカデミックな空間の外部に起源をもち、しかも植民地という収奪空間の内部から発生したこと、たとえばそれがエメ・セゼールの視点であったことに私たちは留意しておきたい。「形式的ヒューマニズムと哲学的諦観の彼方にはヒトラーがいる」(セゼール [1997: 127]) ことを看破した彼の植民地主義論が世紀転換期の今日にいたって新たな意義をおびようとしているのは、それが近代市民原理に内在するひとつの歴史的矛盾であるもの、もしくは『人権宣言』に由来するアイロニーとも悪夢とも呼びうるものの内実を直観していたからにほかならない。純粋なユマニズムを本願として近代西欧で成立したはずの国民国家原理が、20世紀にいたってファシズムと帝国主義という二つの派生形態をうみだし、そのいずれもが未曾有の暴力装置として作動してしまったという悪夢、つまりは「平等な真の市民とはだれか」を問いかけた瞬間に「だれが市民ではないのか」という問いかけもまた生まれ落ちてしまうアイロニーにまつわる、一連の悪夢である(真島 [1999] [2000a] [2001])。

しかしながら植民地統治、とりわけ仏領西アフリカの過去に生起したもろもろの悲劇をめぐる『荒野の40年』は、かつてより語られてはこなかった。20世紀転換期の「平定」作戦、およびその後の強制労働・徴兵等の統治政策による犠牲者数についても、ナチ第三帝国期のユダヤ人犠牲者をめぐるラウル・ヒルバーグの研究水準はおろか、大西洋奴隷交易システムの黒人奴隷「輸出」数についてカーティンとラヴジョイがかつて交わした「歴史修正主義」論争の水準にすらいたっていない<sup>(2)</sup>。なにより仏領西アフリカ研究にとって致命的な不在を画しているのは、1970年代以降のヨーロッパ・ファシズム研究でことのほか尊重され重視されてきた、暴力の被害者自身による声と記憶の集合である。旧仏領象牙海岸植民地、現在のコートディヴォワール共和国について、その20世紀植民地史を物語る文献群のうちに、軍事平定を指揮した植民地総督による大部の報告書(Angoulvant [1916])や、ヴィシー政権期に抑圧的な政策を推進した植民地総督による自己正当化の「回顧録」(Deschamps [1975])は存在しても、おなじ時代におなじ空間を生き死んだ

黒人村落民の声は、そこにはない<sup>(3)</sup>。そこにはエリ・ヴィーゼルも、プリモ・レーヴィも、ビンヤミン・ヴィルコミルスキーもいない。そこにはクロード・ランズマンが映像をつうじて、あるいはマイケル・ペーレンバウムが公式記録をつうじてすくいあげたあれこれの声（ペーレンバウム [1996]）も、ない。仏語圏西アフリカ諸国の独立からすでに40年の時が経過したいま、少なくとも植民地の個人体験をじかに語る声々は子どもらが語りつぐ集合的な記憶の内へと吸収されながらも、それ自体としてもはや永遠の不在の途に至り着こうとしてしまっている。「ここにはなぜはない」ばかりか、その「なぜ」をあえて問おうとするアカデミズムが尊重すべき足場すら、ここにはない。

仏領西アフリカに生きた村落住民の声と記憶をじかに書きとめたテキストがこれまで稀少だったのは、たとえばその歴史がヨーロッパ・ファシズムに比べて“いくぶん悲惨さの薄い暴力”からなる事件の総体だったから一ではけっしてない。あるいは西アフリカをめぐる既往の帝国主義研究が経済史学中心であり、そこでは西欧の資本輸出にまつわるレーニン＝ホブソン・テーゼの適用をめぐる是非もしくは幻想の有無が取りざたされてきたこと（竹内 [1990]）、すなわち“上からの”帝国主義研究史であったことも、私たちのいう声と記憶の不在にとってはその副次的な要因にとどまるだろう。問題とすべき不在の原因は、むしろ西アフリカという土地が一奴隷交易システムのごとくたとえば「アメリカ合州国史」に接続されたりしないかぎり一世界史にとっての最たる辺境のひとつとみなされてきた点にあり、しかもその意味では“辺境のなかの辺境”とでも呼べそうな西アフリカ村落諸社会での主たる伝達媒体が、研究者人口に限りのある数々の口承言語—長らく「無文字言語」という欠損の響きを負わされてきた言語—からなっていた点にあるものと仮に推測してみよう。文献史学流の「世界史の辺境」を現実の辺境とみなすことなくオーラルヒストリーに真摯な耳を傾けようとしてきた一部の歴史学者の前に、こうして口承言語の越えがたい壁が立ちはだかつてきたとすれば、アカデミズムの枠内で口承言語によるそれらの声を歴史として一「学術

的言語資料」としてでなく一書き付けられる者は、人類学者のほかにはいないとさえいえるのかもしれない。しかしながら、口承言語が歴史学者にとって技術上の障害になってきたとすれば、それをさほどの障害とは感じない人類学者もまた、植民地の記憶や体験を語るあれこれの声を前にしたとき、無自覚であるだけにいっそう深刻な別様の障害、いわば方法論上の、といってもよい障害にみまわれはしないだろうか。たとえばそれは、「なぜ」の問いを容易には発しがたい暴力のありさまが語られているまさにその瞬間、その現場に、これまで自らの特権的な説明概念であって来た「文化」なり「アイデンティティ」なりといった好便な理論展開の用具をすぎさま外挿し、そのことで記憶の内容を「解明」=改釈してしまう行為に由来する障害である。「ここにはなぜはない」という指摘のうちにはしたがってこの場合、倫理的な次元とともに方法論的な次元での問題がひそんでいる。さながら歴史教育の一環としてナチ絶滅収容所の生存者が教室に招かれたその席上で、「あなた方はそれでもなぜ抵抗しなかったのですか？」と尋ねてしまうフランス人の高校生が重苦しい回答拒否にであうように、暴力にまつわる記憶それ自体を前にしたときの安易な「なぜ」、そしてその「なぜ」に応ずるための安易な説明概念「文化」など、ない。「アフリカの諸文化」は植民地という暴力にたいしてなぜ体制を揺るがすほどの抵抗をしなかったのか、という「なぜ」の問いがもつペシミスティックな外見—むしろ外見にすぎないもの—から抜けだすために、これを「アフリカの諸文化はいかに植民地体制への受動的な抵抗 (*résistance passive*) を図ってきたのか」という「いかに」の問いへと装いを変えてしまうアカデミズム流の「なぜ」と「文化」は、ここにはないのである。

なるほど植民地の記憶を書きとめていく人類学者の作業も、またひとつの表象化であることにはかわりはない。だがそれは、初発からあらかじめ企図された「文化」表象でもなければ「抵抗」表象でもあってはならない。外部の権威をもって「かつてのアフリカの主体」を認定するための表象でもなければ、もっぱら「暴力」のみを感傷的に喧伝するための表象でさえ、それはあ

ってはならない。これまで当の「声」が長らく不在であった以上、それは初発から「なぜ」に向かうための表象化ではなく、表象化に際して「なぜ」の問いがもたらしてくる誘惑をつとめて警戒しながら、個々人の語る具体的な記憶の枠内で「いかにして」の問いを極限までたどりなおしていくための作業でこそなければならない。

冒頭でふれたように、フランス本国の約8倍の面積を有していた仏領西アフリカのうち、以下のテキスト群の収録地は旧仏領象牙海岸植民地（現コートディヴォワール共和国）西部のマン管区ダナネ地区（現ダナネ県：総面積5580km<sup>2</sup>）にかざられている。しかもフランス植民地期の行政単位カントン（表1）でいえば、同地区を構成していた6カントンのうち、以下では Blossé、ロレ（Lollé）、クーランレ（Koulinlé）の3カントンで生じた事件の記憶が対象とされているにすぎない（図1、表2）。しかしながら、それがあくまで植民地という、同時代の非西洋世界を対象としてある程度まで画一的な構築が試みられた西欧帝国主義の統治システムをめぐる住民側＝被統治者側の記憶であるからには、これらのささやかな証言例にも、単に象牙海岸にとどまらず仏領西アフリカ、ひいては他のフランス海外領土にまで連絡可能な、「いかにして」の問いに応ずる可能性が潜在していることになる。対象とされる地域が限定されているにもかかわらず本章を「仏領西アフリカの記憶」と題したのも、そうした視点の持ちようをもつばら留意するがためであり、それが本研究プロジェクトに参加した一人類学徒にとっての「世界のなかのアフリカ」の姿であるといってもよい。

以下では、40のテキストを3期の時代区分、すなわち平定作戦期（1897～1915年）、両大戦間期（1915～39年）、脱植民地期（1940～58年）へとおおまかに分類しながら、内容が相互に関連するものを順に並べた。

1の「平定作戦期」では、ダン村落社会における初期の白人観をしめしたごく短い語り（テキスト番号101-102）ののち、フランス植民地軍がダナネ侵入の過程で（103-104）、住民の銃を徴収するなどの「平定」作業をいかに遂行したのか（105-107）、また当時のダン住民がいかなる理由から隣国リベリ

表1 仏領西アフリカの統治機構

行政単位	管轄職
仏領西アフリカ	連邦総督
AOF	Gouverneur-Général
↓	↓
植民地	植民地総督
Colonie / Territoire	Gouverneur de Territoire / - de Colonie
↓	↓
管区	管区司令官
Cercle	Commandant de Cercle
↓	↓
地区	地区長官
Subdivision	Chef de Subdivision
-----	-----
↓	↓
プロヴァンス (Province)	プロヴァンス長 (Chef de Province / Chef supérieur)
↓	↓
カントン Canton	カントン長 Chef de Canton
↓	↓
トリビュ Tribu / Groupe	トリビュ長 Chef de Tribu / - de Groupe
↓	↓
村 Village	村長 Chef de Village

(注) 破線はフランス人行政官と原住民首長の境界をしめす。

(出所) 真島 [1999]。

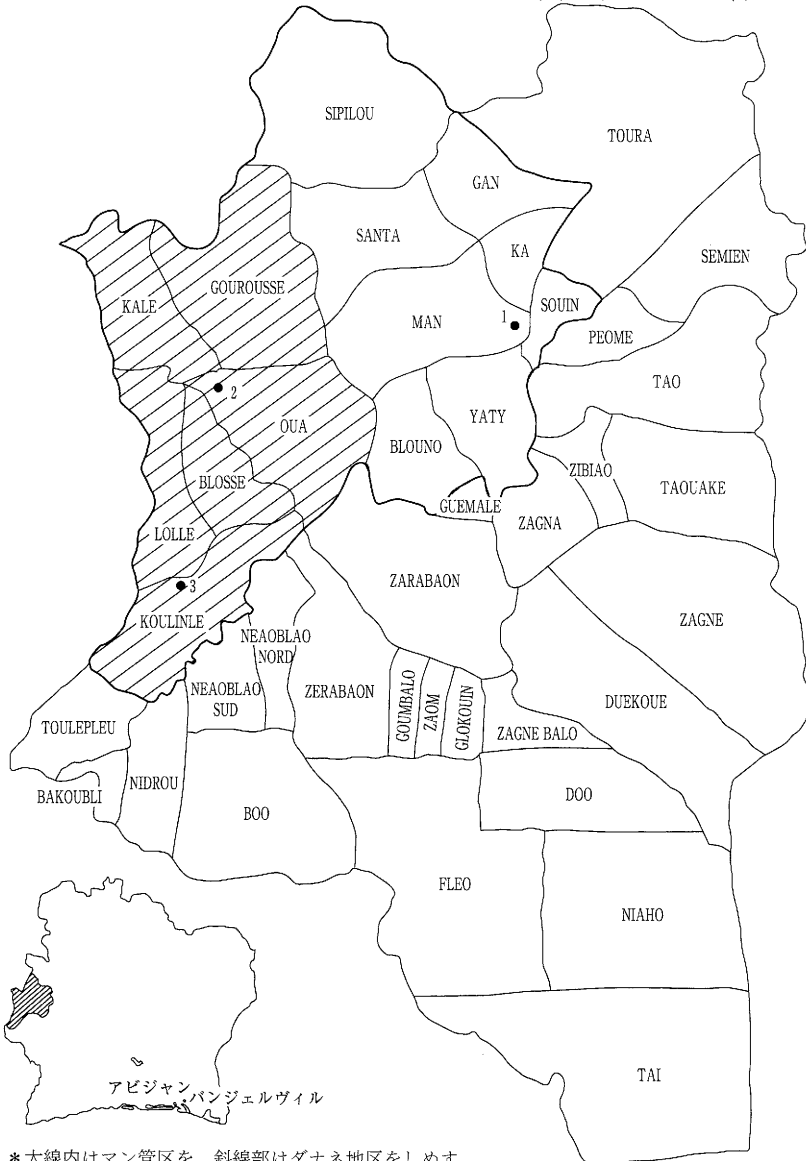
表2 独立前夜(1957年)のダナネ地区南部3カントン

カントン名	グループ数	村落数	人口(人)	面積(km <sup>2</sup> )
ブロッセ Blossé	11	62	18,130	680
ロレ Lollé	6	54	11,598	600
クーランレ Koulinlé	5	76	15,314	708

(出所) ANCI EE 2704をもとに筆者作成。



図1 仏領象牙海岸植民地マン地方のカントン区分 (1934~1960年)



\* 太線内はマン管区を、斜線部はダナネ地区をしめす。

\* 数字を付した・は、かつて植民地拠点だった以下の市街地をしめす。

1 : マン市, 2 : ダナネ市, 3 : ズアン＝ウニアン市

(出所) Ministère du Plan [1966] をもとに筆者作成。

アへ集団規模で逃亡したのか (108-109), さらにフランス植民地行政の発端を画する行政区分の設定や植民地首長の任命作業がいかなる手つきでなされ (110-113), 植民地経営の合理化をねらった小村破壊政策がいかに行われたか (114) について, 各地の村々で語りつがれてきた記憶, 計14篇を紹介する。

2の「両大戦間期」では, 植民地首長, とりわけカントン長とフランス人地方行政官の行政上の関係 (201-202), およびフランス植民地権力を背景にすえたカントン長の権力にまつわる記憶 (203-204), また人頭税徴収や強制労働に由来する暴力が村落とそこにくらす個々人の生に投げかけた暗い記憶 (205-208), さらに男子結社組織をはじめとするダン村落社会旧来の政治構造の変質にまつわる記憶 (209-212) の事例をあげる。くわえて世界恐慌を引き金とする1930年代仏領西アフリカの行政機構再編にまつわる記憶 (213) や, その後の首長家形成プロセス (214), 秘書職の出現についての記憶 (215-216) もふくめ, 計16篇を紹介する。

3の「脱植民地期」では, 厳密に言えば脱植民地化前夜にあたるヴィシー政権期のダナネ地方でおきた, ひとりの原住民首長の自殺事件<sup>(4)</sup>をめぐる記憶 (301-303) をはじめ, 教育エリート形成 (304) や創設直後のアフリカ民主連合 (RDA) にまつわる記憶 (305), さらに第二次大戦後も継続した強制労働と徴兵にまつわる記憶 (306-307) の事例をあげる。くわえて独立前夜1958年のダナネ地区をみまった首長罷免事件およびカントン長選挙<sup>(5)</sup>の衝撃をめぐる記憶 (308-310) もふくめ, 計10篇を紹介する。

各テキストの末尾には, 個々の語句や史実にまつわる最低限の注記を付したほか, テキスト全体をつうじて頻出する語彙等については, あらかじめ「植民地とその統治をめぐるダン語基本語彙」の項をもうけ, 11の基本語句に関して注記を付した。

また章末には, テキストの内容に関わる略年表 (付録1) のほか, 象牙海岸マン地方の平定作戦進行図 (付録2), 原住民首長の系譜 (付録3), ダナネの歴代地区長官一覧 (付録4), 象牙海岸植民地の歴代総督一覧 (付録5) など, 訳文の通読をたすける資料を付録として添えた。テキストに登場する

人名、発話者の氏名については、植民地首長による権力行使の実態もふくめ忠実な証言記録を望まれたカントン長の実子ドー・マベア氏をはじめ（本章以下204, 301参照）、話者の意向とそれぞれに異なる主張・見解とを尊重し、あえて実名のままに記載した。

なお、ダン語もしくはフランス語による発話原文については、本プロジェクトの中間報告書『アフリカ比較研究に向けて—諸学の挑戦—』（平野克己編、2000年、アジア経済研究所）pp.227-247を参照されたい。

このうち平定作戦期の記憶をめぐるテキストについてはすでに真島 [1997 a: 196-203] で4篇を発表している。うち2篇は訳文に若干の修正をくわえ、本章105, 110で再録した。

〔注〕

- (1) ダンはコートディヴォワール西部からリベリア共和国東部にかけての内陸森林地域に居住し、マンデ語群・南東グループのダン語を母語とする集団である。現在40万人前後と推定されるコートディヴォワール側のダン語話者人口は、同国内のマンデ語群・南東グループ系諸語のうち最大である。なお、本稿でいうダナネ地方南部とは、同共和国の行政区分におけるダナネ (Danané) 県ズアン=ウニアン (Zouan-Hounien) 郡、バン=ウィエ (Bin-Houyé) 郡、およびダナネ郡南西部をさす。
- (2) ex. ヴァイツゼッカー [1986], ヒルバーク [1997], Lovejoy [1983] [1989].
- (3) 1987年、アビジャン市内の出版社でコートディヴォワール共和国・国民通史の編纂をめざしたモニュメンタルな書籍『メモリアル・ド・ラ・コートディヴォワール』全4巻が発行された。しかし同国の植民地史をあつかった第2巻では、コートディヴォワール植民地史学の権威ピエール・キプレにより国民自身の記憶を最大限に救済しようとする真摯な執筆方針が貫かれているにもかかわらず、既存の口承資料の欠如が行文中に深刻な影を落としている (Kipré [1987])。
- (4) この事件の詳細については、真島 [2000b] を参照されたい。
- (5) この事件の詳細については、真島 [1995] を参照されたい。

## 植民地とその統治をめぐるダン語基本語彙（訳語の五十音順）

イエntenネ yentènè／カピテーネ kapitèènè

それぞれフランス語の《Lieutenant》《Capitaine》が転化したもので、植民地軍のフランス人将校をさす

クマナ kumana

フランス語の《Commandant》が転化したもの。語りの脈絡が植民地期であればフランス人の管区長官または地区司令官をさし、独立以後であれば共和国政府任命の県知事または郡知事をさす

ゴ Gô

植民地化以前のダン村落社会で一定の影響をもっていた男子結社組織、もしくはその代表者である結社長をさす。ゴ結社は、数カ村～数十カ村の規模をもつダンの地縁単位「セ se」の組織原理をなし、村落生活における紛争調停の権力として機能していたものと推定される（真島 [1997b]）。そうしたゴの権力基盤は、フランスの植民地化による接合統治の導入、およびカントン長への裁定権の移行にともない、大きく揺るがされることになった（本章以下209-212参照）

ゴの村 Gô pō

ゴの結社長ポストを代々継承してきた父系リニージがくらす、各セの枢軸村

ズアン＝ウニアン村 Zuënwïö

ダナネ県ズアン＝ウニアン郡の郡庁所在地ズアン＝ウニアン市（1988年センサスで市街人口8494人）は、1913年の平定作戦に際してフランス側の軍事基地が建設されるまで、小村のひとつにすぎなかった

ダナネ村 Daandhō

ダナネ県の県庁所在地ダナネ市（1988年センサスで市街人口3万506人）は、平定作戦前夜の1906年にロラン中尉が軍事基地を建設するまで、小村のひ

とつにすぎなかった

土地の父 sè dè／戦争の父 glu dè

仏領西アフリカの原住民政策で法制化された原住民首長「カントン長」をさすダン語表現。この脈絡での「土地＝セセ」とは、植民地の行政区分「カントン」の意であり、「父」はカントン長への讃え名にちかいニュアンスをもつ。植民地化以前のダン社会では、ゴ結社の配下に一種の「戦争首長」ともいえる戦士層のリーダーがおり、「戦争の父」の讃え名で呼ばれていた。平定作戦に際してダナネ南部の各地で任命されたカントン長は、ゴ結社のいわば防壁としてフランス側にさしだされたこれらの「戦争の父」だった。そのため、植民地化以前の「戦争の父」と、植民地期のカントン長をさす「土地の父」とが、今日にいたるまで概念としてしばしば混用されてきている

ヌオン川の向こう Nuon zlöö／yi zlöö

リベリア共和国の領土をさす。ヌオン川(リベリア呼称：セス川)は、ダン居住域内における仏領西アフリカとリベリアとの自然国境を形成していた  
ブロード plôôdhô

植民地期の強制労働による賦役夫をさし(とくに本章201参照)、フランス語の《prestataire》が転化したものと推測される。ダンのフランス語話者はこれを「奴隷esclave」とも訳すが、植民地化以前の村落社会にみられた家内奴隷については、別の名詞がダン語に存在する

兵隊 dhasi (白人の～／マンデの～)

フランス語の《soldat》が転化したもので、植民地平定軍の指揮下にあった仏領西アフリカの黒人編成部隊のこと。ダン族居住域には、現在のセネガル、マリ、ギニアの北マンデ系出身者からなる狙撃兵混成部隊が投入された

ミタニョー mitanyôô

フランス語の《mitrailleuse》が転化したもので、平定作戦期の仏領西アフリカ軍に流通した銃架付き機関銃(ヘッドリク [1989: 97-148])をさす

## インタビュー記録

インタビュー記録の表記について

- ・テキスト中の […] は、編集上の中略箇所をしめす
- ・テキスト末尾のカッコ内の事項はそれぞれ（話者名／日時／場所／主たる使用言語）を示す
- ・フランス語もしくはダン語音声表記による転写テキスト原文については、中間報告書を参照されたい

### 1 平定作戦期

#### 101. 初期の白人観 I

むかし白人がやってきたばかりのころ、われわれは白人のことを「ニャーンテデ」と呼んでいた […] 白人が戦争をもちこんできたとき、まだ白人のことを知らなかったものだから「ニャーンテデ」と呼んでいた。「プクンチアンデ」とも呼んでいた。そのころのわれわれは、まだ白人に勝てると思っていたからそのように呼んでいた。

(*Yômi Gèigbô* / 1994.11.23 / トロンウニアン村 / ダン語)

#### 102. 初期の白人観 II

白人はわれわれとはちがう。むかしわれわれは白人を「ディチアンデ」と呼んでいた。

(*Tiôgbodhè* / 1988.10.16 / グアカトゥオ村 / ダン語)

#### 【語句】

白人：フランス人

ニャーンテデ：脂質の豊かな白色の地虫（種は未同定）

ブクンチアンデ／ディチアンデ：森深くに住むとされる異形の妖怪

【注記】

フランス人をさすダン語の名詞「クィkwi」は、もともと他界の超常的な精霊を意味していた。植民地化の最初期におけるフランス人が、祖先の眼にはこの「クィ」や「神の子zlan bha nē」、また森の奥深くに住まう異形の妖怪として映っていたというモチーフは、ダナネ地方の多くの口頭伝承で共有されている。とりわけ白色の地虫「ニャーンテデ」に白人を含意させた表現は、外来文化を拒絶するゴ結社の会合などで、今日でも一種の蔑称として用いられる。なお「クィ」という言葉が、本来の「精霊」から植民地期の「フランス人」を経て、独立後は「コートディヴォワール政府」までも含意するようになった経緯については、Majima [1997: 277-282] を参照されたい

103. 平定軍の侵入 I

白人がやってきたとき、最初にウシを殺したのはマードゥエーだ。白人が村々をまわっているとき、ビアントゥオ村の戦士たちは白人に戦争をしかけようとその後を追っていた […] 白人は背後に敵がいることに気づくと歩みを止め、その場に荷物を置き、ガラス瓶の破片を道にぶちまけた […] それらの品物を地面にうち捨てて、白人の兵隊は林に身をひそめて敵がくるのを待っていた。ビアントゥオの戦士がそこにやってくると、ああ、戦士たちは走って逃げて、物を壊して壊して…そして白人の兵隊が彼らすべてに発砲したのだ。

(*Kuèmi Pascal* / 1994.11.19 / ズアン＝ウニアン市 / フランス語)

【語句】

マードゥエー：クーランレ初代カントン長。ビアントゥオ村出身。1906年任命。1916年3月25日、リベリア側の捕虜となり消息を絶つ（付録3参照）

白人の兵隊：基本語彙参照

【注記】

象牙海岸ではアングルヴァン総督の任期（1908～16年：付録1，5参照）を通じ、領内各地で軍事平定作戦が進行した。ダナネ地方で平定軍に降伏した村落では、恭順の意をしめす手段としてウシが屠られ、白人欲待用に供された。上記テキストにあるビアントゥオ村の戦士長マードゥエーがクーランレ初代カ

ントン長に任命されるのは1906年のことだが、平定作戦が完了する1915年まで、ダナネ南部では戦士層を中心とした村落住民の武力抵抗が散発的に生じていた

#### 104. 平定軍の侵入II

白人がやってきたとき、白人は […] マードゥエーの客人となった […] マードゥエーは白人のためにウシを殺し、ロレのゴ結社長がくらす村に使者をつかわした。マードゥエーとロレの結社長とは親しい間柄だったからだ […] マードゥエーはロレの結社長に使者をつかわして、「村の者は、白人の通り道に銃で待ち伏せしようと言っているが、白人のためにこの私がウシを殺したからには、水の中に手を入れることにしたい」と言った。だからロレに白人がやってきたとき、ロレの結社長も彼らを客人に迎えたのだ […] マードゥエーは「だれも白人に銃をむけてはならない」と前もって人々に注意を与えていた […] しかし、人々がすべて村を逃げだしてヌオン川の向こうへ去った後も、マークガグルウという男が「おれは川向こうへ逃げたりしない。沼のほとりに隠れてしよう」と言った。そして白人が沼までやってきたとき、マークは白人に銃をむけた。その沼は見通しのきかない森の中にあったものだから、身をひそめるマークを白人は見つけられなかった。そして白人が沼までやってきたとき、マークの者たちは銃をむけたのだ。ズアン＝ウニアン村で白人が最初に建てた基地は今の群庁舎のところにあったのだが、白人はそこから双眼鏡を目にあてて、あたりを見回した。そうしてとうとうラフィアヤシの林の後ろにマークの姿を見つけ、「見つけたぞ」と言った。白人はその場所に行き、マークに銃弾を浴びせた。マークの腿は銃弾で砕けてしまった。それでもマークは、プツ、プツ、プツと這っていった。プウ川のほとりまで這っていったところでマークは力つきてしまった。その死骸は編みカゴに入れて運ばれた。プウ川というのは、ベー川の向こうにある川の名だ […] マークはゴの言葉を聞き入れずに身を隠したのだ。彼は戦士だったから、沼のほとりに身を隠したのだ。そんなところに身を隠せなどと、ゴは言わなかった。ゴはあらかじめ注意していたのだ。人々



はホウキを手にしながらか白人の通り道を歌って歩いたというのに。人の言うことを聞き入れない者はむかしもいた。聞き分けのない者ということだ。

(*Boya Mabheagbö* / 1994.11.30 / ズアン=ウニアン市 / ダン語)

【語句】

マードゥエー：103【語句】および付録3 参照

ウシを殺す：103【注記】参照

グ：基本語彙参照

水の中に手を入れる：武器をすてて戦いをやめる

ヌオン川の向こう：基本語彙参照

ホウキを手で歌って歩く：暴力を禁止する空間でなされる儀礼的な舞踊行為。

特定の女性グループにより今日も行われる

【注記】

平定作戦後半期の1913年にズアン=ウニアン村（基本語彙参照）で生じた、ダン住民の大規模な武力抵抗をのべた一異伝である（付録1参照）。この時期のゴ結社は外来の武装勢力から結社の存在を隠すとともに、戦士層のリーダーをフランス平定軍との交渉役にあてたり、武力抵抗の前線に配置していた。これに対し一般村民は、戦乱を避けるために村落を放棄して集団でリベリア領内に逃亡した。1913年のズアン=ウニアン村における武力抵抗とフランス軍による銃徴収については、106、110、111も参照されたい

105. 銃の徴収 I

むかし白い肌の者が最初にやってきたとき、彼らはベイトアの客人となった。客人となった白人は、ゲレ族の土地を通過してやってきた。白人は、この土地にたどり着くまでにゲレの者たちと争いをおこしていたのだ。このときの白人の銃はミタニョーと呼ばれるものだ。白人はミタニョーを25丁も持っていた。白人はミタニョーで、ゲレの土地の者を40人も殺していた。殺した者の左耳はすべて切り取って紐にくくりつけていた。そうしてこんどは、われわれの土地にやってきたというわけだ。白人が「ゲアの息子ベイトアよ、こんにちは」と言うと、村の者たちはみな森へ逃げ込んでしまった。しかしベイトアと兄のニャンウェ・グウブ、弟のゲイ・ブドゥウだけは、村に残っ

た。すると白人はベイトアにむかい「われらはおまえの客人だが、おまえはわれらを客人に迎えるか、それともゲレの者のようにわれらと争いをおこすつもりか」と尋ねてきた。ベイトアは「あそこに私の祖父デアボーの木がある。客人はデアボーにとり善き者だった」と答えた。白人は「そうか。ならばわれらはおまえの客人だ」と言った。するとベイトアは立ち上がって言った。「来なさい。いっしょに行こう」。このころベイトアは、73頭のウシをもっていた。なかでも一番大きなウシを選んで、ベイトアはバナという男に話しかけた。バナというのは、シピルーの土地からきた男で、白人の通訳をさせられていた者だ。つまり白人がまず白人の言葉で話す。すると白人が従えてきたマンデの兵隊がそれをマンデの言葉にかえて話す。そしてバナというのはダンの者で、マンデの言葉も聞き分けたから、マンデの言葉をこんどはダンの言葉にかえて話したというわけだ。ベイトアはそのバナにむかい「私の客人よ、これがあなたの方のためのウシだ」と言った。マンデの兵隊が大きなウシを銃で撃ち殺していたとき、銃の音を耳にしたこの土地の者たちは「あそこにはいったい何者がいるのか」と話しあっていた。「森にはいま狩人などひとりもいないぞ。それにしてもずいぶん遠くまで音の聞こえるたいへんな銃だ」「まったくだ」などと話しあっていた。白人は銃を25丁持っていた。その銃がゲー、ゲーと鳴り響いたのだ […] ゲー、ゲーと鳴り響いたあとには、ウシが静かに死んでいた。白人はこの村で二晩をすごした。そして村を去るとき、白人が私の父ベイトアに呼びかけると、ベイトアは答えた。白人は彼にむかい「おまえがわれら白人と争いを起こさぬと言うのならそれでよい。われらがやってきたというのは、おまえに富を与えるためにやってきたのだ」と言った。「われらとの争いを見いだす者には、富をやるつもりはない。争いを見いださぬ者には、富をやろう」。白い肌のイエンテネがベイトアに呼びかけてこう言った。「おまえが争いを見いだす代わりに、われらのためにウシを殺したからには、われらはおまえに富を与えにやってきた。おまえは善い行いをした。おまえはこの村にとどまれ、私はこれからガンドゥ村へ行く」。ところでむかしの銃というのは、マンデの言葉で「コンコ」

と呼ばれる火打ち銃だった。白い小石を筒の先に詰めると火が点くような銃のことだ。ケツ、ケツ、ブンツと火をあげた銃のことだ。ニャンウェ、ベイトア、パーン・ゲアといった祖先の者たちは、こうした銃を人々から取りたてた。そのころはまだランプもなければ懐中電灯もなかったのだから、彼らはたいまつを灯した。たいまつを灯して、銃の取りたてに出かけた。そうして村に戻って数えてみると、33丁の銃が集まっていた。このロードゥにくらす者たちから、彼らはそれだけの数の銃を取りたてた。白人は「ベイトアよ、おまえが土地の父となり、おまえたちが白人との争いを二度と見いださぬように銃を取りたてるのだ」と言っていたからだ。だからベイトアたちは、人々が白人と戦争をしないよう真夜中に銃を取りたてた。パーン・ゲアは、むかしこの村にいた偉大な力士だ。みごとな体格の頑丈な男で、背も高かった。銃の入ったニワトリ籠を彼が肩にかついだ。「おれさまの頭の上に乗せるにはおよばぬ軽さだ」と彼は言った。ベイトア、パーンゲア、ニャンウェの三人は村を発ち、翌日の昼ちかくガードゥ村にたどり着いた。村に着くと、彼らは「白人たちはどこだ」と尋ねた。村人たちが「あそこに座っている」と答えたので、三人はそこに行った。そして通訳のバナに「われわれは銃をもってきた」と告げると、バナはマンデの兵隊を通じて白人のイエンテネに「彼らが銃をもってきました」と告げた。このとき白人には25人の兵隊がいて、バナを入れればその数は26人、イエンテネも入れれば27人という勘定だ。イエンテネはやってきて、「それではおまえたち、ニワトリ籠の口を開けてみろ」と言った。籠を開けて数えてみると、銃は33丁だ。するとイエンテネは私の父ペイにむかい「おまえの土地には村が12もあるというのに、これだけの銃しか取りたててこなかったというのか。さあ、おまえは横になれ。横になってそこに頭を乗せろ、これからおまえの首を斬ってやる」。私の父は身をおこすと、地面に横たわった。するとこのとき、ガードゥ村まで三人についてきていたペーブルー村のチウ・グラオンブが両手を耳にあててこう言った。「この者はわれわれの土地の富者なのです。どうかこの者の首だけは斬らないでください。どうしてもというのなら私の首を斬ってください」

と言ったのだ。すると私の父は「立て」と言われて立ち上がり、代わりにチウ・グラオンブが横になった。だがチウが横になると、イエンテネは「身をおこせ」と言ったものだから、チウは身をおこした。イエンテネは言った。「今から仕置きをしてやる。銃についてはまだ少しずつ向こうに残っているだろうから、おまえたちはそれを一つのこらず取りあげてくるのだ。おまえたちを殺さずにおくが、仕置きとしては、これから兵隊がおまえたちを打ちすえる」。そうしてマンデの兵隊は三人を打ちすえた。鞭で打たれて、私の父はとうとう片目がつぶれてしまった。顔からは血が噴き出て、歯も三本抜け落ちた […] ベイトアが銃を取り集め、ふたたび白人のところへ銃を納めに行くと、白人は「この土地では、おまえがこの土地の父となれ」と言ったというわけだ。私の父はゲアということになっているが、実はベイトアがもうけた一番最後の男子こそ、この私だ。私がまだ小さいころにベイトアは亡くなったので、ベイトアの息子で私の長兄にあたるゲアが「この子は自分の子だ」と言ったのだ。ベイトアのようなむかしの富者は、品物を売って金をこしらえていた。ベイトアはゲレの土地に行つて、コーラの実を買い付けた。そしてそれを運んで、北からやってきたマンデの者たちに売っていた。

(Göü Geagbö/1989.04.18/イエイルー村/ダン語・一部未転写)

#### 【語句】

ベイトア：旧ヨロレ初代カントン長。イエイルー村出身。1909年任命

ゲレ族：ダンに隣接するクルー語系民族。その正確な自称は「ウェWè」

ミタニョー：基本語彙参照

デアポーの木：イエイルー村に現存するイロコ (*Chlorophora excelsa*) の大木 (cf. 会田 [1959: 147-148])。同村の神話的創設者デアポーとともに、村落起源伝承で中心的なモチーフをなす

シピルー：現ビアンクマ県シピルー郡の郡庁所在地。ダン居住域最北部に位置し、住民は北マンデ系文化のつよい影響をうけてきた

マンデの兵隊：基本語彙参照。なおここでいうマンデとは、正確にはマリンケ語やバンバラ語など、マンデ語群北マンデ系に属する諸言語とその話者である北方サヴァンナの出身者をさす

イエンテネ：基本語彙参照

土地の父：基本語彙参照

ロードゥ：旧ヨロレカントンの母体となった地縁集団の自称

力士：ダナネ地方のダン村落社会では、いわゆるセネガル相撲にあたるレスリングが男たちの乾季の娯楽をいろいろってきた（真島 [1991b]）

両手を耳にあてて：降伏・降参・謝罪の意をあらわす身ぶり

【注記】

1934年のカントン統廃合に際し、それまでダナネ南部の一角を占めていた「ヨロレ」「北クーランレ」「南クーランレ」の3カントンは、「北クーランレ」を母体とする新カントン、クーランレに吸収合併された（213【注記】参照）。上記テキストは、このうちヨロレ初代カントン長の末子である話者が父祖の首長任命の経緯について語ったものである

106. 銃の徴収II

われわれは白人を怖れていた […] むかしは白人にひどい行いでもしようものなら、そのひどい行いが自分に返ってきて殺された […] 白人はすべての者から銃をとりあげてズアン＝ウニアン村に穴を掘り、穴の中に銃をみな埋めてしまった […] むかしの戦士の武器はもっぱら槍と刀だった […] 銃というのは、白人がもってきた銃身をマンデの者たちが白人から買っていたのだ。われわれ黒人は、白人からもマンデの者からも銃身を少しづつ買っていた。買った銃身は、その扱いをよく心得ているマンデの鉄鍛冶師のところにもっていき、木を当てさせた […] われわれの祖先は、コーラの実を詰めたカゴを頭に乗せてマンデの土地に行った。コーラの実を採って、それをヤコドゥやベイラまで運んだのだ。コーラの実を持って行った者は、そこでマンデの者から銃身を手に入れたのだ。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

【語句】

ズアン＝ウニアン村に穴を掘り…：基本語彙および104【注記】，111参照

マンデの者たち：105【語句】参照

ベイラ：ギニア共和国南東部，現ベイラ県の県庁所在地。住民の大半はマリンケ系で，植民地化以前から北マンデ系交易者を中心とするサヴァンナ＝森林

辺縁域の一交易拠点となってきた(真島 [1997b])。「ヤコドゥ」も、同種の交易拠点名がダン語の発音に沿って転化したものと推測されるが(ヤコドゥグ?), その正確な所在は不明。なおペイラには、20世紀転換期にフランス人ダナネ探査団の拠点となった仏領西アフリカ軍事基地が存在していた

### 107. 銃の徴収III

私をもうけた父, そのまた父の父はゴだった。その息子, つまり私の父をもうけた者もゴだった。わたしの祖父にあたる彼の名はクエミという。クエミの父はプウバスという。白人はプウバスがゴのところにやってきて, 人々から銃を取りあげようとした。そのときわれわれと争いをおこした白人は, プウバスを銃で撃ち殺したのだ。ゴであった私の曾祖父が白人に殺されたことは, 私も人から聞いていた。だからわれわれは, 今でも白人をみると逃げだすのだ。むかし白人に背くことは高くついた。だから白人がゴの村にやってくると, 人々はいまでも白人が争いをもちこんできたと思うのだ。

(Niule/1990.03.12/マーブルー村/ダン語・未転写)

#### 【語句】

ゴ: 基本語彙参照

#### 【注記】

ダナネ地方最南部に位置するマーブルー村は「最も偉大なゴ」が存在するゴの村(基本語彙参照)として, 植民地化以前から地域住民の崇敬の対象となってきた。「この村では白人を受けつけない」という理由から村内での聞きとりを拒まれ, 話者の畑の出作り小屋で行われることになった上記インタビューでは, 平定作戦期の銃徴収にまつわるダン村落社会の決定的な不幸が「語るべきでないこと」のひとつとして語られた。一般にダン社会でゴの結社長は不死の存在とされ, 結社長の死にともなう死骸の埋葬は今日でも秘密裡に行われることを鑑みれば, 村人の眼前での結社長殺害が当時いかに大きな衝撃をともなうものだったか想像にかたくない。他方, 当時の軍政務文書によるかぎり, 平定軍を指揮した植民地将校がゴ結社の存在を関知していた形跡はほぼみられない

## 108. リベリア逃亡 I

いったいだれが白人に逆らえたというのか。白人がブッとやってきて、われわれの祖先と争いをおこしたとき、今おまえが目にしてある場所はどこもかしこも、村の跡地になってしまったのだぞ。われわれはみなヌオン川の向こうへと立ち去ったのだ。だれもこの土地にとどまっていたはいなかった。いったいだれがこの地にとどめられたというのだ […] ゴも逃げなかったはずがあるだろうか。ゴさえもこの土地にとどまっていたはいなかった。戦争がはじまったとき、この土地には何ひとつ残っていなかったのだ。

(*Bhaadaü Zeegbö* / 1994.11.27 / プアグルー村 / ダン語)

## 【語句】

ヌオン川の向こう：基本語彙参照

ゴ：基本語彙参照

## 109. リベリア逃亡 II

われわれの祖先が逃げたというとき私はまだ幼かったのだが、そのことはよく知っている […] われわれが逃げたというのは、戦いが厳しくなり白人との殺し合いも激しくなってきたから、私も母親たちと一っしょに逃げたのだ […] 父親たちはこの村に残って白人と戦った。母のもとにいたわれわれは、みな逃げてヌオン川の向こうに行った。この村に戻れる時がやってくるまで、われわれは川向こうにいたのだ。すると父親たちが「白人は強いから勝てない」と言って戦いをやめた。戦いをやめたので、われわれはみな引き返し、ここに戻ってきた […] われわれがヌオン川の向こうで五つの晩をすごしてから白人との戦いは終わった。われわれが川向こうにいるあいだも、リガルー村のグアが白人と戦っていた。そのグアが戦いをやめたものだから、われわれは七日後に川を渡り戻ってきたのだ […] 祖先が戦いをやめて白人にウシを支払うと、白人は「おまえたち、村に戻れ」と言った。白人との戦いをやめたというのは、ラフィアの葉を投げたということだ。祖先はそのと

キラフィアの葉を体に巻きつけた。すると白人は「おまえたちが本当に赦しを乞うているのなら、若い雄牛をよこせ」と言った。祖先が若い雄牛をさしだすと、白人は「おまえたち、村に戻れ」と言った。それでわれわれは村に戻ってきた […] むかし祖先は白人に勝てると思い、戦士を呼び集めた。しかし戦いがはげしくなったので、人々はヌオン川の向こうへ逃げだしたのだ。

(*Bhaadai Zeegbö* / 1994.11.27 / プアブルー村 / ダン語)

### 【語句】

ヌオン川の向こう：基本語彙参照

白人にウシを支払う：103【注記】参照

ラフィアの葉を投げる：「ラフィアの葉」とは、ゴの聖所入り口に掛けられる、ラフィアヤシの葉で作られた暖簾状の結界である（真島 [1991a]）。それを「投げる」とは、戦争の敗者が降伏の合図に結界を右手でかざしたり、全身に巻きつける行為をさす

## 110. 接合統治の模索

白人がわれわれの土地に最初にやってきたというのは、白人はまずウィオーンドゥの土地にやってきた。マープルー村のゴがラーの時代のことだ。ウィオーンドゥの者は、白人と争いをおこさなかった。彼らは、戦争を終わりにするときのゴのしるしとして、白人にラフィアの葉を投げていた。戦争をするつもりがないことを白人に示したのだ。彼らは白人に言われるがまま、戦いの道具もさしだした。白人はこのころ、もうダナネ村に白人の村を建てていた。そして村の者たちに「ここから南の土地は、いったい誰と誰が治めているのか、誰と誰が富んでいるのか」と尋ねていた。ダナネにいた白人というのは、白人のことばでイエンテネとかカピテーネと呼ばれる者たちだ。このうちイエンテネは、ゼアレ村の富者ボエンのもとをときどき訪れていた。ゾドやバトゥウの父にあたるボエンのことだ。白人は、そこで戦士たちから銃を取りあげていた。白人はゼアレ村もダナネのような白人の村にしたかったのだ。そしてボエンも白人との戦争を望まず、白人の言うことに従っていた。白人はボエンに尋ねた。「ダナネ村からここまでの土地は、いったい誰



と誰が治めているのか」。このときボエンが白人に教えたのは、ロレの土地のベアドゥウという男だ。そこで白人は、ロレの土地のベアドゥウを呼び出した。だが、ベアドゥウが白人に会いに行こうとすると、ロレの者たちはベアドゥウを責めたうえ、こともあろうに白人に戦争をしかけてしまった。そもそも白人がロレの土地に初めてやってきたとき、人々は白人に「いったいおまえらは何の用があって、ここまでやってきたのか」と言っていた。白人が銃を取りあげようとしても、ロレの者はまるで従わなかった。その白人が、こんどはゼアレ村のボエンに連れられて、ロレの土地のズアン＝ウニアン村までやってきたのだ。ロレの者たちは白人に戦争をしかけた。白人があわててダナネに戻ろうとしたとき、ボエンは白人をかくまってゼアレ村まで連れてきた。ボエンは白人に言った。「こうなったら、あなた方はまずゲレ族の土地まで行った方がよい。トゥレブルー村でゲレの土地を治めている者に会った方がよい」と忠告した。トゥレブルー村で土地を治めていたのは、ズオ・トゥオというゲレの男だった。トゥオは、プロッセやロレ、クーランレの土地の富者をしのご偉大な人物だった。白人はトゥオのところにやってきた。白人はやってきて、ダナネ村からトゥレブルー村までのすべての土地の名と、それぞれの土地を治めているダンの者の名をトゥオに尋ねたのだ。トゥオは白人が聞いてきたことなら、どんなことでも教えた。トゥオは、クーランレの土地の南側を治めているドウバー村のトロの名も白人に教えた。そこで白人は、トロをトゥレブルー村まで呼び出した。トロがやってくると、白人はこう言った。「おまえのくらす土地はおまえのものだ。だが、おまえたちの武器は、すべてわれわれに渡せ」。トロは白人の言うことに従った。白人はトロに「ダナネ村からズアン＝ウニアン村までやってくる途中の道の左側は、いったい誰が治めている土地か」と尋ねた。それはヴァ・ウィユの土地をさしているのだから、トロは白人に、ピアントゥオ村の戦士マードゥエーの名を教えた。そこで白人は、こんどはマードゥエーをトロのところに呼びつけた。そしてマードゥエーに命じて、ヴァ・ウィユの土地の戦士たちからすべての武器をとりあげた。白人はマードゥエーに「おまえた

ちの土地の近くを治めている者は誰か」と尋ねたので、マードゥエーは、ロレの土地のベアドゥウの名をあげた。「おまえたちがズアン＝ウニアン村でしかけてきた戦争に、ベアドゥウは加わっていたか」と白人が尋ねると、マードゥエーは「ちがいます、ベアドゥウは戦争に加わっていませんでした」と答えた。ベアドゥウは、ブロッセの土地のポエンと同じように、白人との戦争を望んでいなかったからだ。だが白人は、ズアン＝ウニアンでの戦争を理由にして、ベアドゥウに罰金をつきつけてきた。

(Kaakô/1988.09.06/グアカトゥオ村/ダン語・未転写)

### 【語句】

ウィオーンドゥ：ダナネ地方最南部に位置するダンの地縁集団名。ゴ結社の枢軸村マープルー（107参照）の存在で知られる。文中の結社長ラーについては不明

ラフィアの葉を投げる：109【語句】参照

ダナネ村：基本語彙参照

イエンテネ/カピテーネ：基本語彙参照

ポエン：ブロッセ初代カントン長。ゼアレ村出身。1911年任命（付録3参照）

ゾド：ブロッセ第4代カントン長。1933年任命（付録3参照）

バトゥウ：ブロッセ第3代カントン長。1917年任命（付録3参照）

ベアドゥウ：ロレ第2代カントン長。バヌー村出身。1909年任命（付録3参照）

ロレの者たちは～戦争をしかけてしまった：104【注記】参照

ズアン＝ウニアン村：基本語彙参照

ゲレ族の土地：105【語句】参照

トゥレブルー村：現ギグロ県トゥレブルー郡の郡庁所在地。ダナネ以南の平定作戦により、フランス軍が1913年8月に占領、軍事基地を創設した。住民の大半はゲレ族

トロ：旧南クーランレ初代カントン長（105【注記】、213【注記】参照）。ドゥバー村出身

ヴァ・ウィユ：旧北クーランレ・カントン（105【注記】参照）の母体となった地縁集団の自称

マードゥエー：103【語句】および付録3参照

## 【注記】

上記テキストは、ダナネ＝トゥレブルー間の平定作戦をめぐる一異伝である（付録2参照）。平定作戦の事件史が話者の語りによりある程度まで伝承化しているため、カントン長の任命をめぐる前後関係は必ずしも史実と一致していない。しかし「ダナネからトゥレブルー村までのすべての土地の名と、それぞれの土地を治めているダンの者の名」を尋ねてまわるフランス人将校の姿には、「族」という集団と「首長」という個人の発見を通じて接合統治を確立していく仏領西アフリカの統治心性のありようがひとときわ鮮明に表出している（真島 [1999]）。なお「白人がロレの土地に初めてやってきたとき」とは、1900年前後のダン族「発見」期にダナネ地方を通過したオスタン＝ドロン探査団をさすものであり（d'Ollone [1901], 付録1参照）、平定作戦期のダナネ住民に対する「罰金」は、しばしばこの十数年前の探査団に対する「妨害行為」の名目で徴収された

## 111. カントン長の任命 I

このロレ・カントンで、最初にカントンを指揮していたのはビアンイトゥオ村の長老ゲイ・ベアドゥだ。しかし白人がやってきたとき、このバヌー村にいたベアドゥウという戦士が正式な初代カントン長に任命された。長老のゲイがこう言ったからだ。「白人というのがやってくるそうだから、私の前にはベアドゥウを立てておこう。やつには問題が多すぎる。白人と会うのはベアドゥウにさせておけばよい」。ベアドゥウは生け贄のようなものだったのだ。だが当のベアドゥウには、この最初のことがらが幸いした。白人が陣どるサロブルー村に行った彼は、白人と何の争いもおこさず協定書に署名した。白人の言葉にそむかなかったということだ。そこで白人は「よし、今日からはおまえがカントン全体を指揮しろ」と言った […] ベアドゥウがカントン長に就いたのは1916年のことだ。白人は当時、ヌオン川沿いに南下しながら地域の全住民をフランスの植民地下におこうという段階にあった […] ベアドゥウは白人がやってくる以前から、争いがおきると人々に呼ばれて戦争をしていた。彼の力はたいへんなものだったから […] 白人がやってくるのがわかると、人々は彼を白人と対抗させようとしたのだ。ところ

が白人に会いに行く道すがら、彼は考えを変えて白人との協定書にすぐさま署名することにした。だから白人は、ベアドゥウに植民地功章とカントン長任命の証書をさずけたのだ […] この証書は今でも私の従兄弟がもっている […] 証書がベアドゥウに渡されたのは1918年のことだ。白人たちのみるところ、彼は忠実だったからだ […] ゴはベアドゥウと折り合わなかった。だからベアドゥウを前線に送りこんでしまえば、彼は白人に戦争をしかけて、ことによれば死んでくれるものと彼らは思っていた […] だがベアドゥウは白人を連れて村へ戻ってきた。そして白人からカントン長に任命されていたというわけだ。それ以来、ゴは白人に対抗するだけの権力を失い、入植者に脅えるようになってしまった […] ところで当時のズアン＝ウニアン村には、バンという名の戦士がいた。ズアン＝ウニアンで白人に抵抗したのもバンだ。白人はこのとき、戦士たちから土着の古い武器をすべて取りあげ、ちょうどいまズアン＝ウニアンのある場所に武器を埋めてしまった。ベアドゥウが権力をにぎる以前のできごとだ。氏族の時代だ。白人がやってきた時点で、ロレ・カントンは部族の時代に入りかけていた […] そこでは無秩序が支配し、最も強い人間が部族を指揮していた。だがベアドゥウがカントン長に配置されたことで、このバヌー村からパントゥウブルー村におよぶ彼の支配がはじまった。その支配領域は、むしろプンタ村からパントゥウブルー村にまでおよんでいた。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

【語句】

ゲイ・ベードゥ：ロレ初代カントン長。1906年任命。1909年死去（付録3参照）

ベアドゥウ：110【語句】および付録3参照

ヌオン川沿いに南下しながら～植民地下におこうという段階：付録2および110参照

ゴ：基本語彙参照

ズアン＝ウニアン村で白人に抵抗した：104【注記】参照

【注記】

上記テキストは、ロレ・カントン長の任命の経緯を語るものである。話者の説

明とはいささか異なり、ベアドゥウのカントン長任命はゲイの死去にともなう1909年であり、ベアドゥウは13年のズアン＝ユニアン武力抵抗でもフランス側に一定の貢献をしめしていた。その彼に手渡されたという「1918年の証書」とは、おそらく同年発行の「原住民首長の特徴記載カード」をさすものと思われる(ANCI 2EE8.09, 真島 [1999])。民族学的な知識も身につけた話者による「氏族」→「部族」→「カントン」の発展図式は、接合統治を通じて「集団的な歴史主体の萌芽」を構築しようとしていた当時のフランス植民地帝国の統治心性(110【注記】および真島 [1999])を反映した発想として興味ぶかい。なお、戦士を「前に立たせておく」というゴの権力イマージュについては真島 [1991a]を、また植民地期におけるゴの権力減退については本章209-212を参照されたい

## 112. カントン長の任命II

むかしわれわれの土地で、われわれの目のまえて白人のためにウシを殺したのはキアンドゥウだ [...] ウシを殺したのはキアンドゥウだが、白人がやってくる以前に土地の父だったのはマードゥエーだ。あるときクエブルー村の者たちとピアントゥオ村の者たちがクエブルー村で争いをおこした。このとき、クロジアレ村のキアンドゥウが仲裁に入って、「離れろ。おまえたちのしていることは善くないことだ」と言ったものだから、ピアントゥオの者たちは村に帰り、クエブルーの者たちはそこにとどまったのだ。するとダナネの白人の場所からクマナがやってきて、われわれの祖先に尋ねた。「全員が争いをしているときに仲裁に入った者がいるというが、その者のしたことは善い行いか、それとも悪い行いか」。そこで一同が「善い行いでした」と答えると、白人は「そうか、マードゥエーよ、おまえはもう土地の父ではない。キアンドゥウよ、これからはおまえが土地の父になれ」と言った。キアンドゥウが白人のためにウシを殺したというのは、そういうわけだ。とりわけこのときの争いは、人殺しの道具を手にした争いだった。人殺しの道具を手にした争いだったからキアンドゥウはそこに行き、「離れろ。殺し合いはもうやめろ。ピアントゥオの者たちよ、ここを去れ」と言ったのだ。そ

ここで白人のクマナは「そうか。キアンドゥウは壊れるはずのものを壊さずにすませて仲裁に入ったのだから、マードゥエーよ、おまえはもう土地の父ではない」と言ったのだ。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

【語句】

ウシを殺す：103【注記】参照

キアンドゥウ：クーランレ第2代カントン長。クロジアレ村出身。1915年任命  
(付録3参照)

土地の父：基本語彙参照

マードゥエー：103【語句】および付録3参照

クエプルー村：ヴァ・ウィユ (110【語句】参照) におけるゴ結社長在任の村

ビアントゥオ村：マードゥエー (103【語句】参照) の出身村。植民地化以前より戦士の村として地域住民に知られてきた

ダナネの白人の場所からクマナが…：基本語彙参照

113. カントン長の任命III

このとき白人は「誰がおまえたちを仲裁したのか」と尋ねてきた。するとクエプルー村のトゥウという男が「私たちはキアンドゥウのおかげで、ビアントゥオ村の者たちに皆殺しにされずに済んだのです」と答えた。クエプルーではすでに12人の村人が殺されていたからだ。こうして行政府はキアンドゥウの功績をみとめた。キアンドゥウが善良な人間であることをみとめたのだ。そうしてカントンはキアンドゥウに託された […] 白人はすでに1911年から、このズアン＝ウニアン土地に軍事基地を築いていた。この地方の人々は、白人に銃を手渡すためにその基地まで歩いて行った。このときクロジアレ村の祖先たちから銃を集めた者こそ、クイギオの父キアンだった。キアンは戦士だったから、恐れというものを知らなかった。そこで人々は、白人のところまで銃を手渡しに行く役目を彼に任せただ。銃をもってきたのがキアンだったから、白人はキアンの名を記録したというわけだ。

(Kuèmi Pascal / 1994.11.19 / ズアン＝ウニアン市 / フランス語)

## 【語句】

クロジアレ村：クーランレ・カントン長の在住村

クイギオ：クーランレ第3代カントン長。1934年任命（付録3および真島  
[1995] 参照）

## 【注記】

上記の2テキスト112-113は、ダナネ平定作戦の完了直後になされた旧北クーランレ・カントン長（105【注記】、213【注記】参照）の首長交替にまつわる伝承である。好戦的なビアントゥオ村民だった初代カントン長マードゥエーは、ヴァ・ウィユで生じたこの内紛により更迭され、フランス側に銃を自発的に供出した内紛調停者キアンドゥウが第2代カントン長に任命された。なおズアン＝ウニアン軍事基地の建設は話者の説明よりやや遅れた1913年のことである（付録1参照）

## 114. 小村の破壊

むかしここには出作り小屋や仮小屋しかなく、われわれの祖先はそうした小屋しか建てない場所であらしていた。白人がまだやってこないころのことだ。祖先はみな、出作り小屋を建ててくらしていた。だが白人がやってくると、白人は「出てこい。おまえたちはともに集まり大きくなれ」と言った。そこで祖先は住まいを移し、やってきて一緒になった。白人が出作り小屋を壊してしまったからだ。そこで祖先はともにやってきて、大きな村を建てた […] 白人は祖先をむりやり捕まえた。だから祖先はやってきて、ともにくらしはじめた。白人は出作り小屋に残っている者を捕まえて、出作り小屋を壊してしまった。だから祖先はやってきて、ともにくらす村を建てたというわけだ。白人は祖先の首を紐でくくって殴った。そして「ここを立ち去り、村を建てろ」と言ったのだ。

(*Yömi Gèigbô*/1994.11.23/トロンウニアン村/ダン語)

## 【注記】

平定作戦期の仏領西アフリカでは、税徴収や物資搬出の円滑化をはかるため、領内各地に散在する小村を強引に解体・統合しながら接合統治の新たな行政区分を設定する政策が推進された。住民の強制労働による道路建設で、まもなく

これらの集合村は幹線道に沿って連絡され、バンジェルヴィル総督府へといたる物資流通システムが内陸各地に確立することになる

## 2 両大戦間期

### 201. カントン長と司令官 I

むかしゾドがした仕事というのは、白人がゾドにブロードを求めてきたのだ。人々はゴムを採った。またゴザを編んだりアブラヤシの実から油を採っては、それを取りまとめて白人に納めていた […] ブロードというのは、白人が求めてきた人間のことだ。白人は「おまえたちのなかから働く者を出せ。われらの庭を手入れしろ。木を彫れ」とか「アブラヤシのプランテーションに來い」などと言ってブロードを求めてきたのだ。

(*Wümë Bagôgbö* / 1994.11.21 / ゼアレ村 / ダン語)

#### 【語句】

ゾド：110【語句】参照

ブロード：基本語彙参照

ゴム：パラゴムの自生樹から採取されるパラゴム乳液。ダナネ地区におけるゴム供出については216, 303, 306, および301【注記】参照

木を彫る：ダンの木彫「美術品」は、パリを中心とした両大戦間期の西欧世界で、アール・ネーグルの作例として高額で取引されるようになっていた（ポドラ [1995]）

### 202. カントン長と司令官 II

むかし「ピレ様」と呼ばれていたクマナがいた。クイギオはこのピレのお抱え狩人だった。クイギオの父キアンドゥウが土地の父だったころのことだ。だからキアンドゥウが亡くなったとき、司令官のピレはクイギオの名を紙に書いて「おまえの父はもう死んだのだから、これからはおまえが土地の父だ、おまえが土地の父だ…」と言った […] 戦争の父の仕事というのは、自分



のための仕事ではなかった。クマナが伝令係の者に「戦争の父のところへ行って、これこれの品物をもって来させるよう言え」と命じたのだから、それは戦争の父が自分のためにする仕事ではなかったのだ。戦争の父が村人に「おれの仕事をやれ。おれが食べるような食べ物をよこせ」などと言ったわけではない。クマナは「キアンドゥウのところへ行ってプロードを集めさせろ」「クイギオのところへ行ってプロードを集めさせろ」「徴兵をさせろ」「ヤシ油を集めさせろ」「肉をもって来させろ」「ジャコウネコをもって来させろ」と言ったのだ。人々はそう言われたものだから、森をめぐってジャコウネコを探すはめになったのだ。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

#### 【語句】

ピレ様というクマナ：第32代ダナネ地区長官Paloumet（任期1935年）をさすものと推測される（付録4参照）。クマナについては基本語彙参照  
 クイギオ：113【語句】および付録3，もしくは真島 [1995] 参照  
 キアンドゥウ：112【語句】および付録3参照  
 戦争の父：基本語彙参照  
 プロード：基本語彙参照

### 203. カントン長の権力 I

ドーにしろ、ダノにしろ、マベアにしろ、その祖先のベアドゥウにしろ、彼らはみな戦士であって、彼らが蓄えた富というのはみな白人の時代のものだ...彼らは生身の人間をなぐった。これでもかとなぐった。白人のことがらを考えてみればよい。ロレから出征した兵士の多くは、彼らになぐられてむりやり徴兵させられた者たちだ。金を集めることにしても、白人が1人につき1フラン玉1枚と言ってるのに、村に帰った彼らは玉2枚、玉3枚などと言う。そして村人をなぐる。小便をかける。火を背中に当てる。寒い風の季節に縛りあげてバナナの葉の上に寝かせ、上から水をかける。そして「さあ金を呼んでみろ」と命令されて「お金、お金...」と言わされる。体を縛られ、地面に転がされているあいだに、おまえの妻は玉1枚のかたとして彼

らの手にわたる。「よし、おまえはそこでそうしている。おまえの女と小屋で寝てみてぐあいがよければ、玉1枚を貸してやる」と言う。そして妻を連れ去り、小屋で彼女と寝る。もどつてくると「おまえの女はぐあいがよくない。やっぱり金でも呼んでろ。そうすれば金の方で返事をしてくれるだろう」と言うのだ。そうしたとき、自分の身内に娘が一人でもいれば、おまえはその娘を遠くの富者のところにも嫁がせて、玉1枚を工面することになるだろう。富者から婚資を受けるということだ。こんなことがいいかげん続いたあとで、シトワイヤンがやってきた […] バヌー村に醜い女はいない。金はないが美しい妻をもつ男がいれば、連中はその村に行つて女を捕まえたからだ。妻が美しいというだけで、彼らは何の見返りもよこさず、むりやりわれわれの妻を捕まえた。「おまえに何がある。女くらいは持つてんだろう」と言いながら。

(*Boya Mabheagbö* / 1994.11.30 / ズアン=ウニアン市 / ダン語)

【語句】

ドー：ロレ第5代カントン長。バヌー村出身。1943年任命（付録3参照）

ダノ：ロレ第4代カントン長。バヌー村出身。1934年任命。1943年自殺（301～303および付録3参照）

マペア：ロレ第3代カントン長。バヌー村出身。1925年任命（付録3参照）

ベアドゥウ：110【語句】および付録3参照

金を集めること：村落巡回の手法による人頭税の徴収

寒い風の季節：アルマタンが到来する大乾季

身内に娘が一人でもいれば…：206参照

シトワイヤンがやってきた：コートディヴォワール共和国独立をさす現代ダン語表現

【注記】

同一の話者によるテキスト205も参照されたい

204. カントン長の権力II

カントン長はたいへんに敬意をはらわれていた。フランス人はカントン長を自らの指揮下におきながら、一定の認可と権限を与えていた。たとえば、

今は亡き私の父は32人の女を妻にしていた。父は村民から税を集め、銃登録の窓口にもなっていた。カントン長は、ダナネ在住の地区長官とじかに話をするのが唯一ゆるされた人物だった […] 7月14日の祝日には、住民全員がカントン長に品物を納め、カントン長がそれを地区長官に贈ったものだ。だからカントン長とフランス人のあいだには強い結びつきがあった […] カントン長はたいへんに富んでいた。当時のカントン長は人々に罰金を科したし、労働もさせた。また美しい娘をもつ者のところへカントン長がやってきて、「おまえの娘が気に入った」と言う。娘を見つめるカントン長の脇には、彼の付き人が必ず誰かいる。カントン長が娘を見つめて気に入れば、いろいろな品物が娘の親に与えられたものだ […] 人々はカントン長の覚えをよくしようと、グループをつくって村を発ち、バヌー村にやってきては彼のプランテーションを拓いたものだ […] 私の父の俸給は月額2万2500フランにまで達した […] さっきも言ったように、カントン長は地区長官と会うことのできる唯一の人物だった。白人がカントン長に、200フランの税徴収を求めたとしよう。そうしたときに、たとえカントン長が税額を250フランにつりあげても、その行動はまったくチェックされなかった。こうしたことでも彼は収益をあげていた。また税を白人に納めると、白人からはその見返りに村落巡回の費用を支給されてカントン長はもどってくる。月末には俸給ももらえる。そう、かつてこの俸給は「特別手当」と呼ばれていた […] 徴税にかかわる植民地時代の真実は、頭にいれておくべきだ。カントン長は白人の覚えをよくしようとするあまり、このうえもなく残忍だったのだ。私はこの真実について、あなたに言うべき義務がある […] 税を払えない者は炎天下に放置されたり、水をかけられたり、娘をむりやり嫁にやらされるような仕打ちを受けた。だから金のない者は、夜になるのを待ってリベリアへ逃げ出した。リベリアに行ってそこで腰をおちつけた時から、その者はリベリア人になっていた […] そこでダナネの地区長官は、カントン長を召集して指令をだした。すべての村の村長に、課税対象者の人口調査をさせるように命じたのだ。以後は人間の数が白人側におさえられた。そして村長には村落監視

の責任が課されたのだ。指令を受けて帰ってきた村長たちは、各カルチエの長を呼び集めてこう言った。「おまえたちのカルチエで逃亡する者が出たなら、逃げた者の賦役についてはおまえたち自身が肩代わりをすることになる」。つまり当時は、プランテーションで働かされる強制労働の問題があったということだ […] 息子をみすみす村外へ逃がしてしまった者は、父である自分が代わりに働かされたというわけだ。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

### 【語句】

今は亡き私の父：話者はロレ第5代カントン長ドー（203【語句】および付録3参照）の子息

7月14日の祝日：植民地宗主国フランスの共和国建国記念日

俸給は月額2万2500フラン：話者によれば、この額はオタヴィ地区長官期のダナネ、すなわち1950年前後のものであるという（付録4参照）

娘をわりやり嫁にやらされるような仕打ち：206参照

リベリアへ逃げだした：ダナネ地方のダン住民による両大戦間期以後のリベリア逃亡については、207、306も参照されたい

カルチエ：複数の父系リニージがゆるやかに空間を分けて共住するダンの村落で、各リニージの区画はフランス側に《quartier》と呼ばれた

## 205. 犠牲となる女性 I

私の生みの母の夫は、ドーでありダノである。あるとき母の身柄は、ダノからドーへと移されたからだ。ではなぜ私の母の夫がダノでありドーなのか。それは彼らがこのズアン＝ユニアンに税徴収に来たとき、金の問題が私の父にふりかかったからだ。徴収にやってきたのは、ドーとムンムアン・ポータープの二人だった。そのころはダノが土地の父で、ドーが書記の時代だった。彼らが金を集めにくると、私の父には金の問題がふりかかった。ドーは私の父を縛りあげた。そして父を地面に転がしたまま、母が借金のかたにされたのだ。そのころ私はもう生まれていて、ちょうど歩きはじめたばかりの子どもだった。ところで、女というものは新しいもの好きだから、バヌー村に行

った母はそこで子どもを5人産んだ。そのうち4人が今もバヌー村にいらしている。あとでその者たちの名を教えてやるから、明日かあさってにでもバヌー村に行ってみなさい。行ってその名を呼べば、答えが返ってくるだろう。そうしたら「あなたがたの母の名は何といいますか」と尋ねてみなさい。彼らは自分たちの母の名を言うだろう。そうしたら今度は「あなた方の母が最初に産んだ子どもの名は何といいますか」と尋ねてみなさい。彼らは「ズアン＝ウニアンにいるボヤだ」と言うはずだ。この私もバヌー村で育ったのだ。「美しい女はバヌーにいる。バヌー村に醜い女はいない」とさっき私が言ったのは、母がむりやりそこに連れ去られたからなのだ。母が最初に産んだ子は、ここにいる私だ […] 母がバヌー村に連れ去られた後で産んだ子どもは、いったい私のイエの子といえるだろうか。彼らは私の父の子ではない。バヌー村の子だ。そしてこの私は、ズアン＝ウニアンの人間だ。私は彼らと会うこともあれば、あいさつもする。しかし彼らは私の父の子ではないから、彼らのうち女が結婚しても、私とその婚資にあずかることはない。逆にバヌー村にとり、私もまたバヌーの子ではないということだ。

(*Boya Mabheagbö*/1994.11.30/ズアン＝ウニアン市/ダン語)

### 【語句】

ドー：203【語句】および付録3参照

ダノ：203【語句】および付録3参照

土地の父：基本語彙参照

書記：215【注記】参照

ちょうど歩きはじめたばかりの子ども：話者は1931年出生

バヌー村：ロレ歴代カントン長の在住村

### 206. 犠牲となる女性II

あるときブレが、白人からベアの革をもって来るように言われた。けれどもブレは森でベアを見つけられなかったものだから、私はダナネの白人のところへ連れていかれた。村へは帰ってこれなかった。ベアの革を納められなかった罰金は75フランだった。だからブレは、ヨーの土地の者と私との結

婚を決めて、私の婚資として受けとった75フランを白人に納めた。罰金を納めたものだから、私は白人のところを去ってヨーの土地へと嫁いだ。でもヨーの者たちは私につらくあたったので、ブレは次にウィオードゥの土地の者と私との結婚を決めて、ウィオードゥの者たちが支払った75フランの婚資をヨーの者たちに返した。でもウィオードゥの土地はこのグアカトゥオ村からとても遠かったので、ブレはこの村のダーンに相談した。ダーンは75フランをウィオードゥの者に返して、こうしてようやく私は、夫ダーンのもとに嫁ぐことになった。

(Tokpa/1989.07.15/グアカトゥオ村/ダン語・未転写)

【語句】

ブレ：話者の出身リニージにおける当時の長老名

ベアの革：どのような動物か不明

ヨーの土地：クーランレ・カントンに属する地縁集団名

ウィオードゥの土地：110【語句】参照

グアカトゥオ村：地縁集団ロードゥ（105【語句】参照）におけるゴ結社長の在住村

ダーン：グアカトゥオ村出身のロードゥ第10代ゴ結社長。1977年6月逝去

【注記】

上記テキストの話者は、すでに死没したゴ結社長の第一夫人である。納税に苦しんだ植民地期のダナネ住民のあいだではこうした「担保婚ya troon gū sū」が横行し、しばしば初潮前の少女が一種の人質もしくは担保の物件として取り引きされた

207. 強制労働の回避

白人たちは、やってきたばかりのころはわれわれを敬い、われわれに土地の父のことなどを教えてくれた。われわれの土地で暴力をふるうこともけっしてなかった。だが日が経つにつれ、白人のふるまいはひどくなった。白人はわれわれにひどい行いをするようになった。ときどきやってきてはわれわれのこの土地で人をむりやり連れ去り、プロードをさせたり木を彫らせたりした。やってきたばかりのころはそんなこともなかったのに、暴力もふるう

ようになった […] われわれの祖先は逃げて、ヌオン川の向こうへ行った。ある者は川向こうにとどまったのだし、ある者は川のこちら側へと戻ってきた。

(*Yômi Gèigbô*/1994.11.23/トロンウニアン村/ダン語)

【語句】

土地の父：基本語彙参照

プロード：基本語彙参照

木を彫らせる：201【語句】参照

ヌオン川の向こう：基本語彙参照

## 208. 技芸の消滅

ズンというのは、わざを必要とするものだ。そのわざを知っていたのは、われわれの父親たちだ。このうちある者はもう長老となり、ある者は亡くなってしまった。この土地でズンを鑄る仕事は、白人が「ズンを鑄れ」と命じたものだから、この土地にあったズンはひとつのこらず白人のために鑄られて失くなってしまった。ズンドメのダ・ニュアンブが亡くなってからというもの、もう誰もズンを鑄る者がいなくなった。ズンが失くなったせいで、もうだれもズンを鑄ることができなくなってしまったのだ。

(*Lago Benoît*/1994.11.21/クロジアレ村/ダン語)

【語句】

ズン：真鍮

ズンドメ：ズンを鑄る者、つまり真鍮工芸の専門家

【注記】

シール・ベルデュ（失ろう法）を利用したアンクレットや人像の制作で知られるダンの真鍮工芸は、フランスの接合統治が確立していく両大戦期の1920～30年代にかけて急速に衰退した。上記テキストにもみられるように、その一因は強制労働や税徴収の一環として真鍮工芸品が大量にフランス側へ流出した結果、原材が枯渇した点にもとめられる（215参照）。なお同時期のリベリア領内におけるダン真鍮工芸の衰退についてはFord [1991: 279-280] を、ダナネ住民の木彫品供出については本章201, 207を参照されたい

## 209. 村落権力の変遷 I

のちに土地を治めるようになった土地の父とは「白人側の富者」と呼ばれた土地の父のことで […] 土地の父とゴは、たがいに声をとどけあう間柄になかった。このときからゴは白人を「プチアンデ」と呼び、ゴのことがらに關わる裁きだけを手がけるようになった。土地の父はまるでゴを支配する者のようになり、ゴとは別に裁きを行うようになった。ゴの声の多くが、もはや土地を満たす声ではなくなってしまったのだ。プチアンデの言葉を話す者たちの声が強くなり、ゴの声はその後ろに退いてしまった。ゴのことがらは辱められてしまった […] さまざまなことがらが、土地の父の前で裁かれるようになった。女をめぐる争いや、ウシの支払いをめぐる争いまでが土地の父の前で裁かれるようになった […] 野やイエをめぐる問題が村人の間でもちあがると、それはまずゴの前にもたらされた。そして解決がつかなければ、その次に土地の父の前にもたらされるようになってしまった […] 人殺しの裁きもゴの手から離れてしまった。「今どきの者たちはみな白人寄りの者になった。今のことがらはもう私の手を離れ、白人のことがらになってしまった」とゴは言った。生ける者たちの間でおきたことがらは、白人に告げられることなくゴの前にもたらされ、ゴがそれを裁いていた。しかし人殺しのことがらは、ゴの裁きではじめがつかなくなった。ゴが自分ひとりでこの問題を裁けなくなったのだ。人殺しの問題について、人々は白人を怖れていた […] 白人がまだやってこなかったころは、人殺しの問題もゴが裁いていた […] 姦通についても […] 多くの罰金がかかっているときにはゴの前で裁きがあった […] だが人殺しの問題については、すべての者が白人の手の内に入ってしまった。ゴが勝手に裁いたことを白人が耳にしたなら、ゴのところへやってきて理由を問いただしただろう。ゴは人殺しの裁きに関われなくなったのだ。

(*Bhaadati Zeegbö* / 1994.11.27 / プアグルー村 / ダン語)



## 【語句】

土地の父／ゴ：基本語彙参照

プチアンデ：プクンチアンデ、ディチアンデと同じ（101および102の【語句】参照）

プチアンデの言葉を話す者たち：フランス語を話す者たち

女をめぐる争いや、ウシの支払いをめぐる争い：村落で生じた姦通の訴訟や、ウシ一頭分の賠償が科せられるほどの大きな訴訟

野やイエをめぐる問題：土地の用益権をめぐる紛争や、リニージ内のもめごと

## 210. 村落権力の変遷II

カントン長は慣習法をほぼ代表する裁き手だった。植民地分隊や地区長官に移管されないかぎり、彼は犯罪さえ裁くことができた。カントン長は人々に罰金を科すことさえできた […] かつてはゴが裁き手だったが、実際それはアフリカ的な領域での裁き手ということだ。だが植民地時代にはゴの裁けないことがらもでてきた。白人がやってきた時、人々はもう文明への道をさぐっていたからだ。そのためゴの権力はいささか失われてしまった。盟約をむすんだ者同士のもめごとならば […] 白人に会いに行くにはおよばない。ここでいう白人には、カントン長もふくまれている […] かつてゴは犯罪の裁きもしていた。しかし白人がやってきてからは法規が存在するようになった。だから人々は法規を怖れたのだし、犯罪についてもカントン長が裁くようになったというわけだ。人妻をかどわかした者や、他人の畑を焼いた者については、カントン長とゴのどちらも裁くことができた。盟約上のもめごととはもっぱらゴの領分だ […] だがゴの権力が失われる時代がやってきた。白人の到来とともに、殺人を犯した者は法で罰せられることが知られてきたからだ。だから殺人事件は、ただちにカントン長のもとで裁かれるようになった […] ただしそのカントン長も、ゴには十分な権力を行使できなかった。ゴは祖先の王、古来からの王だから […] ゴはカントン長にさえ罰金を科した。ゴとは人知をこえた力なのだ。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

## 【語句】

ゴ：基本語彙参照

盟約：特定の起源伝承にもとづき、異なる地縁集団・血縁集団間がかつて交わされたという儀礼的な盟約関係をさす。盟約関係にある住民のあいだで植民地化以前に生じた事件はたとえ殺人であれ、形ばかりの軽微な賠償物の受け渡しで和解が成立していた

## 211. 村落権力の変遷III

長老による裁きのうちゴに関することがならなら、ひとはそれを長老の前にもってきた。小屋を焼いたり、争いをおこしたり、他人を傷つけたりしたら、それは長老のことがらだが、白人の村でおきたものは白人のことがらだ […] 野はゴだけのものだ。野にまつわる裁きはゴの前にもたらされ、ゴが村の子どもたちのあいだに入った。それはゴの野であってひとはその野で生きているからだ […] 白人がやってくる前は、盗みや姦通のことがらも、もっぱらゴの前にもたらされた。ゴこそが人々の父となる者であり、ゴがあいだに入って子どもたちに決まりをあたえていた […] 土地の父の場所がやってきて、白人が「土地の父を出せ」と言い、土地の父がいるようになってからも、ゴにかかわることがらがおきると、それが土地の父の村であれゴの村であれ、土地の父が話しても聞き入れられなかったとき、それはゴの前にもたらされた。ことがらがゴから白人の前へ移ることはなく、ゴの前でゴによって裁かれた。そして罰金を払う者は罰金を払った。白人のことがらとゴのことがらとは別々だ […] 悪いことがらが生じて、それが白人のことがらならば土地の父が裁いた。しかしそれがゴのことがらなら、土地の父は「ゴのところに行け」と言い、ゴに裁かれた […] ゴの前にもたらされることがらであれば、たとえ土地の父本人の過ちにかかわるものであれ、ゴが土地の父に罰金を命じた。土地の父もまたゴの子だからだ。

(*Yômi Gëighö*/1994.11.23/トロンウニアン村/ダン語)

## 【語句】

長老による裁き：「長老」とはゴ結社長（基本語彙参照）をさす婉曲表現

白人の村：ダナネやズアン＝ウニアンなど、フランス植民地期に形成・発展した市街

野にまつわる裁き：209【語句】参照

土地の父の場所がやってきて：カントン長の制度が導入されて

ゴの村：基本語彙参照

## 212. 村落権力の変遷IV

土地の父もゴを怖れていた。人が土地の父と呼ぶ者は、すべての者のためにいる者だ。ゴもまた、すべての者のためにいる者だ。ただしゴの前へともたらされることがらに、人はだれでもしばられる。ゴの前で裁かれたことからは、絶対に実行されねばならない。土地の父もゴを怖れていた。ゴはドゥの者だからだ〔…しかし植民地期には〕刃物が振りおろされたわけでもなければ人が殺されたわけでもない単なる言い争いについては、村の長老が裁いたが、刃傷ざたになったり死人が出ると、それは白人の裁くことがらになってしまった。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

### 【語句】

土地の父 / ゴ：基本語彙参照

ドゥの者：ゴ結社とそのインナーサークルのメンバーには、超常的な呪力ドゥ (dü) がそなわるとされる

村の長老：ゴ結社長 (基本語彙参照) をさす婉曲表現

白人の裁くことがら：この場合の「白人」にはカントン長もふくまれる

## 213. 行政機構の再編

1934年のことだから、クマナはトゥサルでなくギジェルヴェットのころだ。ギジェルヴェットは、イエイルー村のゲア・パーブに「おまえは仕事をしないが、クイギオはよく仕事をする。そこでこれからは、クイギオにすべての土地を治めさせる」と言った。白人がクイギオに土地を与えたというのは、そういうわけだ。1934年のことだ〔…〕イズウドゥではブー・ヨーブが

土地の父だったが、ブーが亡くなると地元にはもう適当な者がいなかった。だから同じ1934年、白人はクイギオに「イズウドゥの土地には仕事のできそうな適当な者がもういない。そこで北はロードゥのソアンブルー村から、南はゴーイウ川、ポー川のあたりまで、おまえ一人ですべての土地に目をおけ。おまえが仕事をしろ。われらが要求する物すべてをおまえがもってこい。おまえが仕事をやるのだ。すべての土地をおまえが手に入れろ」と言った[…] ゲア・バーブの去った跡におさまる土地の父はいなかった。クイギオは「ここからおまえの土地までの道のりは遠いうえに、私の治める土地はいくつもある。道のりは遠いだから、メトゥウ・ガストンよ、おまえがグループ長になり、私の手前にいろ。ただし土地の父ではないぞ」と言ったのだ。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

#### 【語句】

クマナ：基本語彙参照

トゥサール／ギジェルヴェット：それぞれ第38代ダナネ地区長官Touchard（任期：1941年）、39代ダナネ地区長官Gervaise（任期：1941～43年）をさすものと推測される（付録4参照）

イエイルー村のゲア：旧ヨロレ・カントン（105【語句】参照）の第2代カントン長

クイギオ：113【語句】および付録3、もしくは真島 [1995] 参照

イズウドゥ：旧南クーランレ・カントン（110【語句】参照）の母体となった複数の小地縁集団の総称

ブー・ヨープ：旧南クーランレ・カントンの第3代カントン長。ドウバー村出身

ロードゥ：105【語句】参照

土地の父：基本語彙参照

メトゥウ：1934年のカントン統廃合以降、カントンから「グループ」（表1参照）へ降格したヨロレ・グループ長。イエイルー村出身

私の手前：111【注記】参照

#### 【注記】

世界恐慌にともなう仏領西アフリカの行政合理化政策の一環として、象牙海岸植民地では1934年に当時の総督名を冠した「レスト法令」が施行された。同法

令の趣旨にしたがい、ダナネ地区でもカントンの統廃合がなされ、南部5カントンのうち「ヨロレ」と「南クーランレ」が「北クーランレ」に吸収合併されてクーランレとなり、同時に前二者のカントン長は「グループ長」に降格した。当時の地区長官名にやや記憶ちがいがあがあるものの、1934年という話者の時期設定は正確であり、くわえて植民地総督府の通達で施行されたカントン統廃合のマスター・ナラティヴが、テキスト最終部分ではカントン長の自発的な意志と決定によるものとして語り直されている点が注目される

#### 214. 首長家の形成

ダノがカントン長のころは、その甥である私の父が彼の秘書をつとめていた。ダノの死後には父がカントン長を継承した。父がカントン長に昇格すると、やはりわれわれのイエの者が秘書になった […] 私の父がカントン長だったころ、その弟のトマはバヌー村の村長だった。ダナネに遣わされる役目の者、つまり植民地行政に対するカントン側の大使にあたる役目も父のイトコがつとめていた […] 完全な貴族制だった。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

#### 【語句】

ダノ：203【語句】 および付録3参照

私の父：話者はロレ第5代カントン長ドー（203【語句】 および付録3）の子息

バヌー村の村長：ロレ歴代カントン長の在住村バヌーの行政末端職「村長」ポストも、カントン長の家系出身者に独占されていた

#### 215. 秘書職の出現 I

ここでは鉄を鑄る者がズンも鑄っていた […] ズンが鑄られなくなったのは、ゾドが土地の父となる前のことだ。人々はズンを鑄ることから手をひいたのだ。ひとがズンを鑄っていたのはバトゥウ・ポエンブの時代のことだ […] 土地の父が俸給を得たというのは、彼らは一年ごとに俸給を得ていた。このゼアレ村では1万フランの金を集めて白人に納めていた。フィヌーは小さな村だから、2500フランから3000フランといったところだ。村人の数で額が決ま

っていたということだ。村で集まった金は […] 全額土地の父に渡された。土地の父はここから自分の分を抜きとり、村々の村長の分も抜きとる […] 土地の父は白人に金を納めたのだが、このうち少額だけを納めたということだ。白人はそれだけの金額で仕事をやりくりしていた […] 土地の父になった者には白人の言葉がわからなかった。白人の言葉がわからなかったものだから、土地の父は秘書を連れて白人のところへ行った。クマナのところへ行って、クマナが「土地の仕事、ご苦労」などということばを秘書が通訳した。クマナが「これこれのことをおまえの土地でしろ」と土地の父に命ずるときには、秘書が白人からそのことを言われ、秘書が土地の父に通訳した。秘書になる者は学校に通っていたから、白人の言葉を知っていた […] 秘書に俸給はなかったが、秘書の収入は土地の父の俸給を超えていた。秘書になれば「土地に出向いて銃の数を数えてこい」などの命令をうけるからな。なぜだかわかるだろ […] 土地の父が寝ている時に、村人は秘書に食糧を納め、ニワトリを納めたりしていたわけだ […] 土地の父が手に入れたすてきな品というのは、土地の父は白人が眠るときのようなベッドで寝ていたし、ときおりそのベッドの前で裁きを行うこともあった。それから自転車がほしければ自転車を買ったし、ウマがほしければウマも買った。ウマがほしくて実際にウマを買った。ウマに乗って土地を移動していたのだ。

(*Wümë Bagôgbô*/1994.11.21/ゼアレ村/ダン語)

【語句】

ズン：208【注記】参照

ゾド：110【語句】および付録3参照

土地の父：基本語彙参照

バトゥウ・ポエンブ：110【語句】および付録3参照

クマナ：基本語彙参照

学校：仏領西アフリカの原住民学校

【注記】

両大戦間期の仏領西アフリカでは、カントン長以上の上級首長の周辺に「書記」「通訳」「秘書」といった首長の補佐ポストがつけられた。上記テキストでも示

されているように、これらの補佐ポストにはある程度のフランス語能力が必要とされたため、住民学校での教育を背景に選ばれた彼ら秘書には、フランス語を解さぬカントン長の頭越して権力を行使し蓄財をとげる可能性がひらかれていた。なお、上記テキストで語られる俸給額がどの年代のものかは不明

## 216. 秘書職の出現II (脱植民地期)

カントン長の秘書は、フランス行政府がカントン長に遂行を命じたあらゆる仕事を行っていた。たとえばそれは燧石銃に関する仕事で、銃の所持者のリストを作成して行政府に提出する。行政府に労働力を供出しなければならないときには、賦役夫の名を記したリストを行政府まで届けるのも秘書の仕事だった。またゴザをはじめ、行政府が供出を要求してくるあらゆる種類の品物の記録をとるのも秘書の仕事だった [...] 村人のあいだにもめごとが生じて裁判が開かれたなら、その経過を記録するのも秘書のつとめだ [...] クーランレ・カントンで今あなたが目にしていない道路はすべて、この私が住民とともに建設した道だ [...] 私はヨーロッパ人と道路建設の作業を指揮していた [...] 司令官が私に道路建設の命令を与えたからだ [...] われわれは地元原産のゴムの供出も要求された。叢林に自生する野生ゴムの木からゴムを採取するのだ。この地域にゴムのプランテーションはなかったから、人々は叢林深くまでゴムを探しに行き、ある者はそこで命を落とし、ある者はカヴァリー川の向こうの原生林まで行こうとして溺死してしまった。

(*Kuèmi Pascal* / 1994.11.19 / ズアン=ウニアン市 / フランス語)

### 【語句】

ゴム：201 【語句】 および301 【注記】 参照

### 【注記】

話者のクエミ氏（1994年現在PDCI-RDAズアン=ウニアン支部長）は、第二次大戦前夜の1937年にフランス軍に動員され、マジノ線から帰還した41年に動員解除、43年から独立直前期までは故郷でクーランレ・カントン長の秘書をつとめた人物である（真島 [1995]）。脱植民地期のカントン長秘書として現場で道路建設の陣頭指揮にあたった同氏がいづく矜持と、同じ道路建設に一労働者と

して駆りだされた個人が回顧する過去（307参照）とのあいだには、興味深いニュアンスの差がみとめられる

### 3 脱植民地期

#### 301. ヴィシー政権下の自殺 I

ダノの自殺の原因は、たいへん申し訳ないが、あなたがどんな村に行ってもそのことを尋ねても、あなたがそこでどんな考えを述べたとしても、だれも答えはしないだろう。つまりそれはわれわれの歴史の中の秘密の1ページなのだ。たいへん申し訳ない、あなたにはすべての情報を提供するつもりでいるのだが、私の人生に関わることはお話しできない […] それは、単に白人への秘密というのではなく、われわれのキョウダイにさえ、この村の他の家族にさえ、けっして明かされない秘密なのだ。

(*Doo Mabheha Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

#### 【注記】

上記301と以下の302, 303は、ヴィシー政権下の1943年にダナネ地区で生じたロレ第4代カントン長ダノの自殺事件 (ANCI EE1557.19) をめぐる語りである。1942年末までペタン支持を表明していた仏領西アフリカのうちでも (付録1参照)、象牙海岸はペタン派の歴代植民地総督 (付録5: 18~20) のもと当時「ヴィシーの防塞」とまで形容されていた。その点、アメリカの対独アフリカ拠点リベリア共和国国境に接していたロレ・カントンが、ドゴール派工作要員の国境侵犯を監視するうえで、他の国境地域と同じくただならぬ緊張下におかれていたことは想像にかたくない。また沿岸全域がイギリス海軍に封鎖されていた戦時期の象牙海岸では、ダナネ地方におけるパラゴム乳液の供出をはじめ、国家総動員体制のもとで空前の物資・労働力調達のカントン長経由で住民に課されていた (Lawler [1990])。ロレ第5代カントン長の子息による上記の語りでは自殺事件そのものが秘密の扱いを受け、事件の「真相」に関しては地域住民の語りにも少なからぬ錯綜がみとめられる。ただし、これらの記憶や証言から垣間見えてくるのは、下記302の「ドイツ製の銃」の流通であれ303の「ゴムの



供出」であれ、いずれも辺境のカントン運営の重責に苦悩したヴィシー政権期の一原住民首長の姿にほかならない。なおダノの自殺事件については、真島 [2000b] でやや詳しく論じた

### 302. ヴィシー政権下の自殺II

われわれが自らの上にとどまる時代がやってこようとしていたころ、戦争が激しかったころのことだ。白人の銃と呼ばれていた白人の銃で、ドイツ製の戦争の銃を白人はもってきた。ひとの言うところでは、ダノはそれをかすめとって隠しておいたらしい。白人がそのことを疑いだしたので、ダノはひやとした。そして銃を自分に向けて自殺してしまった […] 白人たちは「銃が失くなったことの真相がはっきりしなければ、土地の父を全員逮捕する」と言った。土地の父全員というからには、ゾド、クイギオ、ダノ、ベイヤケイも入れた7人全員を逮捕すると白人が言ったのだ。これを聞いたダノは戦士だったものだから「自分は友の手を借りて死ぬわけにいかない」と言い自殺した。そう決心したダノに、面とむかって口答えができるような者はこのときいなかったのだ。

(*Le Paul* / 1994.12.07 / ダナネ市 / ダン語)

#### 【語句】

自らの上にとどまる：「自由を得る」すなわち「独立をはたす」

白人の銃と呼ばれていた白人の銃：ダン語の会話表現にみられる冗長語法

土地の父：基本語彙参照

ゾド：110【語句】および付録3参照

クイギオ：113【語句】および付録3参照

ベイヤケイ：同時期のダナネ北部のカントン長名

7人全員：ダナネ地区のカントン数は6であるから、むしろ「6人全員」が正しい

### 303. ヴィシー政権下の自殺III

当時はロレの者たちも、ここにやってきてはゴムの採取をさせられた。ブ

ロッセの者たちもここにやってきてはゴムの採取をさせられた。しかもクイギオはクマナの犬のお気に入りだったものだから、クマナはダノに「おまえはもう長いこと土地の父をしてきたので土地の仕事から外すことにした。おまえの土地はクイギオに与える」と言ったのだ。そのことがダノの心に怒りをよんだ。ダノは「私の土地であるロレの土地が、私から取り上げられてクイギオのような若造に与えられるとはなにごとだ。よかろう、私は自分で土地を去ってやる」と言った […] ダノには仕事がなかったのだ。なぜならこの土地の者たちがゴムを採っていたのは、もっぱらわれわれの土地、カヴァリー川の向こうだったからだ。ゴムの産地はわれわれの土地だったということだ。ロレの者たちも、わざわざわれわれの土地までゴムを採りにやってきていた。だからクマナは「他のどの土地の父よりも、クイギオはよく仕事をする」と言った。そういうわけで、クイギオはすべての土地の父の上にも立ちそうな勢いだった。クマナがロレの土地まで取り上げてクイギオの手にわたすような勢いだったのだ。それを耳にしたダノは「だめだ。そんなことは私の目の前ではゆるされない。自分で死んで立ち去ってやる」と言ったのだ。

(Lago Benoît/1994.11.21/クロジアレ村/ダン語)

【語句】

ゴム：201【語句】および301【注記】参照

クイギオ：113【語句】および付録3参照

クマナ：基本語彙参照

【注記】

話者がここで説明するカントン併合計画は、現存の植民地政務文書にその形跡を確認できない

304. 教育エリートの萌芽

白人はカントン長全員に対し、子息を学校へ入れるよう命じていた […] ダナネには学校があった。「地方学校」というやつだ […] 子どもたちはそこに行った。この学校では白人がすべてを運営していて、生徒は寄宿舎に入れられた […] カントン長の友人なら、彼を通じて自分の子息をそこに入学

させることもできた […] そうした経路を通じて子息を学校に入れた者たちの方が、われわれ首長家とくらべて成功したくらいだ。それは「名士」の指定を受けていた連中だ。また […] カントン長が貧しい家族から妻を娶ることもあった。その妻を愛してさえいれば、義理の兄弟を学校に入れることだってカントン長にはできた。ほかでもないそうした姻族の男こそ、最後はカントン長の子息以上に人生の成功をすばやく手にしたものなのだ。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

#### 【語句】

名士：フランス人行政官から指定を受けた地方有力者で、原住民裁判所の構成メンバーのほか、脱植民地期には代議員選の選挙人名簿にも登録された

### 305. RDAの進出

ダナネのカントン長はみな進歩党の支持者で植民地の側にいた。彼らは植民地から利益をひきだしていたからだ。彼らは共和国の独立をむしろ嫌っていた。独立などになれば、自分の権力は減ってしまうからだ。そう、今の状況をごらんさない。今やアフリカには多党制が存在する。しかし権力をもつ者たちは、多党制など望んでいないじゃないか。当時もそれと同じことだったのだ […] カントン長は、RDAの者たちがこのバヌー村を通過することさえけっして許さなかった。われわれはアフリカ民主連合など認めなかったのだ。むしろわれわれは進歩党の側にいた。白人の政党だ […] バマコで結成されたRDAの者たちがやってきたとき、ダナネのカントン長は全員これに対抗した。だがその一方で、もうこの時にはPDCIの闘士とよばれる市民たちがいた。彼らは学校にかよった後も村にとどまり、PDCI発展の準備をしていたのだ […] こうした連中は、このバヌー村の王家にあたる私の父の者たちのところまでやってきた。そしてわれわれの財産を破壊した。カンブマンをめちゃくちゃにして […] 何もかも焼き払った […] PDCIが権力の座にのぼりつめそうな勢いを見ると、それまでカントン経営で何らかの役割をになっていた者たちに、連中は償いを要求してきたというわけだ […] 共

和国が独立したあとは、私の父のところにはいた32人の妻も、たった13人しか残っていなかった。

(*Doo Mabhea Marcel* / 1994.11.25 / バヌー村 / フランス語)

【語句】

進歩党：ウフェ＝ボワニ主導のSAA（アフリカ人農業組合：1944年結成）に対抗して1946年に結成された政党（Morgenthau [1964], Zolberg [1964]）。支持基盤はアビジャン、グランバサム、アボワソのアニ系知識人層。ダナネのカントン長は、当時のフランス人地区長官からフランス代議員選における進歩党支持を要請されていた

RDA：アフリカ民主連合（Rassemblement Démocratique Africain）。1946年10月の創設以来、ウフェ＝ボワニを代表として仏領西アフリカ各地の独立運動で中心的な役割をはたしたアフリカ人の政治組織。独立後は仏語圏西アフリカ各国の政権与党に成長し、コートディヴォワールでは、コートディヴォワール民主党（PDCI-RDA：Parti Démocratique de Côte d'Ivoire）となった

バヌー村：ロレ歴代カントン長の在住村

私の父：話者はロレ第5代カントン長ドーの子息

306. 戦後の労働と徴兵 I

人々がヌオン川の向こうに立ち去ったというのは、白人がわれわれにむりやり木を彫らせたり、生身の人間をヴァオツ、ヴァオツと殴ったり、ゴムを採集させたり、「ゴム園に行け」と言って生身の人間をなぐったりしたから川向こうへ逃げたのだ [...] われわれは動員をうけて、ここにいるおまえの国にまでむりやり行かされた。白い肌の者たちはわれわれを丁重に扱わなかった。白人がわれわれの身内の男を徴兵しても、われわれは白人の戦争のやり方など知るはずもなかった。われわれが中国に行ったというのは、アドゥエイやらアイフォンやら、インドシナにむりやり行かされたことを話しているのだ。人々がこの土地を去ってヌオン川の向こうへ逃げたのは、殴られるのが怖かったからだ。白人が自分の夫だけでなく自分も殴ったから、女たちは夜が明けると心を痛めて逃げだしたのだ。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

## 【語句】

ヌオン川の向こう：基本語彙および204参照

木を彫らせる：201【語句】参照

ゴム：201【語句】参照

ここにいるおまえの国：インタビューの聞き手であるアジア人（筆者）を意識した発言

中国に行った：「インドシナ戦争（1946～54年）に動員された」の意

アドゥエイ、 아이폰：ベトナム北部のハトゥエン、ハイフンのことか

## 307. 戦後の労働と徴兵II

キアンドゥウが土地の父だったころ、白人が村の者にむりやり要求したのは「おまえたち、獣の子どもを持ってこい」「ハチミツを集めろ」「コメをカゴに詰めて集めろ」「プロードを集めろ」といったことだ。この村にあるようなパポーの屋根の小屋がダナネにもあったのだが、白人は自分の伝令係に「土地に行って、土地の父にパポーを集めさせろ」と言うこともあった。伝令係がやってきて、白人がわれわれに要求したのはそうしたことだった。「兵士を集めろ」と言ってくることもあった。白人はむりやりわれわれの上ののしかかり、そうして出征させられた。この私も白人にむりやり捕まって出征した […] 白人はゴムも要求した。それほど多くの物を要求してきたということだ。カントン長は白人の要求を拒めなかった。人々はみなカントン長の言うことに従っていたし、司令官がこれこれの物を供出せよと言ったならば、カントン長はいやおうなくそれを供出させられた […] クエミは1937年に動員された。私はもっと最近、53年に動員された。ほんとうは私も47年に動員されるはずだったのだが、白人から「おまえの体はまだ小さい。村に帰ってうんと食べて、大きくなってから出征しろ」と言われた。白人は、私の体格がいつもこの位なのを知らなかったというわけだ。だが53年に召集された時、私は「適」になってしまった。「不適」を手に入れられなかった。「適」というのは、おまえを兵隊に採るということだ […] トゥレブルー市

までの道路建設には、山刀を手にかりだされた。手ずから道を整えたということだ。山刀で開いた道ということだ。その街道は人の手で作られ、そして道は開かれた。大きな道を整えたのだ。穴から土を掘ってきては土を棒でバオツ、バオツと打ち固めながらトゥレブルーまで続けていった […] ここにいるような幼い子どもまで作業にかりたてられた。子どもたちが土を頭の上に乗せて運ぶ道具はパ・トーと呼ばれた。編みカゴのことだ。そうして運んできた土を、街道にばらまくのだ。われわれのような大人は棒で土を打ち固める役だ。われわれより年輩の者は、つるはしで土を掘る役だった。

(Lago Benoit / 1994.11.21 / クロジアレ村 / ダン語)

### 【語句】

キアンドゥウ：112【語句】参照

土地の父：基本語彙参照

プロード：基本語彙参照

パポーの屋根：アブラヤシの葉を編んだ屋根材

ゴム：201【語句】参照

クエミ：216の話者であるクーランレ第3代カントン長秘書クエミ氏

トゥレブルー市までの道路建設：1953年着工。216参照

### 308. 首長罷免事件

ダナネではカントン長が裏切りにあったのだ。あらゆる連中が、首長ポストを手に入れて自分がカントン長になりたがったからだ。連中はカントン長になりたかった。だから彼らは現職のカントン長を裏切った。ところがカントン長は自らの職務を遂行してただけなのだ。当時はフランスに権力がある時代だった。そのフランス人が労働の指令を発した以上、人々はそれを遂行しなければならない時代だった […] 当時PDCIを代表していた者はみな、あらゆる連中がカントン長になりたがった。だからそうした連中が人民の面前でカントン長の品位を貶めようとしたのだ。「彼らはフランス人に従った。だから彼らはフランス側の者なのだ」と言って貶めた、そういうわけだ。一方、現在の体制をみてごらんなさい。われわれは独立した。われわれには国

家がある。政府もある。もし今もカントン長が働いていたならば、共和国政府がカントン長に命ずることを、やっぱりカントン長はその通りに遂行しているはずだ、それと同じことじゃないか！

(*Kuèmi Pascal* / 1994.11.19 / ズアン＝ウニアン市 / フランス語)

【語句】

PDCI : 305 【語句】 参照

【注記】

ウェザン・クリバリの代議員ポスト奪回を賭けて戦われた1956年のフランス国民議会選に際し、ダナネ地区ではカントン長による選挙人名簿の不正操作の疑惑が生ずるなか、投票当日には首長勢力とRDA運動員の対立による2件の殺人事件が発生した。その結果、当時の総督府評議会内相モケイは1958年1月、ダナネ地区の首長全員を罷免するとの異例の決定をくだした(真島 [1995] および付録1 参照)。上記テキストは、この時期のダナネ地区における首長排斥の潮流を回顧しつつ、元クーランレ・カントン長秘書のクエミ氏が表明した見解である

309. カントン長選挙 I

ゴーフサが勝つまでのあいだ、選挙はたいへんなことになっていた […] 一方のドーは「土地の父にとどまるのはこの私だ。土地の父の場所は私の父マベア・ベアブのものであり、その父のベアドゥのものなのだ」と言っていたからだ。そしてゴーフサはドーにむかいこう言った。「土地の父になるのはこの私だ。おまえは戦士でありゴの戦士だ。おまえは戦士の仕事をしていればいいのであって、私こそが土地の主であり富者なのだ。これまでおまえがしてきた仕事は私こそがつとめるべきなのだ」と。ちょうど今のクマナにはクマナの憲兵もいれば警察官もいる。そしてクマナとは県知事の配下にあるクマナなのだし、県知事は大臣の配下にある県知事だ。それと同じことだ。ズアン＝ウニアンの人々はこのように結論を出したというわけだ […] ゴーフサは「やつらの暴力には、もううんざりだ」と言った。ドーの者たちは戦士だから、それまではだれもが彼らを恐れていた。そうしたときにゴーフサ

は「私はゴの息子だから、私の父のものだった土地をわたしが手に入れる」と言ったのだ。人をなぐる者となぐらない者と、いったい人はどちらを選ぶだろうか。人をなぐらない者のほうへ行くにきまってるだろうが。

(Boya Mabheagbö/1994.11.30/ズアン=ウニアン市/ダン語)

【語句】

ゴワサ：ロレ第6代カントン長（1994年現在）。ズアン=ウニアン市内のゴ結社長のリネージ出身者。1958年選出。本人の語る下記テキスト310も参照されたい

ドー：203【語句】および付録3参照

土地の父：基本語彙参照

マバア・バアブ：203【語句】および付録3参照

ベアドゥウ：110【語句】および付録3参照

今のクマナ：基本語彙参照。「今のクマナ」とは、コートディヴォワール共和国中央政府任命のイヴォワール郡知事をさす

【注記】

ダナネ地区の全カントン長の罷免（308参照）にともない、同じ1958年には「民主主義の原理にもとづく」カントン長選挙が実施され、住民投票の結果6カントンすべてでRDAの公認候補が当選し、既存の首長家から出馬した首長やその側近は惨敗した（真島 [1995]）。上記テキストは、このうちロレ・カントン長選挙をめぐる語りである。話者はズアン=ウニアン市内のゴ結社長随行役をつとめる長老であり、コートディヴォワール共和国の中央政府から郡知事へといたる現代国家の統治機構が、ゴ結社長と戦士の関係を説明する際の喩に用いられている点が注目される

### 310. カントン長選挙II

第二次大戦のころ、私はアビジャンにいた […] PDCI-RDAが創設された後も、私はアビジャンの友人のところに行った。すると同郷の人々が使いをたてて、御しがたい首長に取って代わるべく私が帰郷するよう、私を探しにやってきたのだ […] そこで私は1958年にこの土地へ帰ってきて、同じ年にカントン長に指名された。この土地を1930年に離れて以来、第二次大戦では兵役をつとめ、動員解除後はアビジャンへ戻っていて、そしてようやくこの



土地へ帰ってきたのは58年のことだった […] 私がアビジャンにいた大戦後から、事態はすでに前進をみせはじめていた。ウェザン・クリバリは、1950年に失った代議員任期の更新を賭けた55年の第2回代議員選で、セクー・サノゴに勝ってみごとに任期を更新した。この選挙に際して私はダナネに派遣された。この私が当時の選挙キャンペーンを指揮したのだ。私はアビジャンを離れ、ダナネ地区で選挙キャンペーンをするために戻ってきた。そうしてキャンペーンをした結果、ウェザンの代議員任期はダナネの住民により更新されたのだ […] そこで私は当局から、カントン長選挙に出馬するには適切な人材とされ、ダナネに送られた。住民の先頭に立った真の民主主義者としてダナネに送られた。そして私は、選挙で他の3人の候補に打ち勝ったのだ […] 御しがたいシェフとはドーのことだ。彼は他人の妻と通じることに恐れをもたない姦夫だった。住民に対する彼の行動もひどいものだった。当時の彼はたえず人々に罰金を科していた。つまり彼は植民者側のカントン長だったのだ […] 私が彼を姦夫というのは、たとえば植民者からの指令を伝えるために訪れた村で、自分の前を美しい女が通りすぎると、彼はその女を連れていって寝てしまったからだ […] 選挙の出馬要請をうけた私は、アビジャン在住のカントン出身者を集めて、私への支持をたのんだ。55年に私がアビジャンからダナネへ戻って代議員選のキャンペーンを行い、ドーを負かしたことを彼らは知っていたから、私ならカントン長選挙にも勝てるものと考えて全員が私の出馬に賛同してくれた […] 私がダナネに戻ると、地元の人々は「あいつがドーに取って代わろうというやつか」とささやいていた。当時のドーにはたいへんな権力があったからだ。彼には金もあればプランテーションもあった。しかも長老だ […] 人々が私に投票してくれたのは、もう植民者のやり方にはうんざりし、ウフェ=ボワニの主張に共鳴したからなのだ。

(Goowasa Alphonse/1994.11.27/ズアン=ウニアン市/フランス語)

【語句】

PDCI-RDA : 308 【語句】 参照

御しがたい首長：《chef récalcitrant》といういくぶん文語色のつよい形容は、  
 当時の選挙キャンペーンにおけるRDA側の常套表現だったものと推測される  
 ドー：203および付録2 参照

姦夫：203参照

【注記】

話者ゴーワサ氏は、先の309におけるロレ・カントン長選挙の当選者本人である

引用資料

I. インタビュー協力者（敬称略）	収録日
<i>Bhaadaü Zeegbö</i> バーダウ・ゼーブ	ゴ結社長筆頭随員役（ロレ） 1994.11.27
<i>Boya Mabheagbö</i> ボヤ・マベアブ	ゴ結社長随員役（ロレ） 1994.11.30
<i>Doo Mabhea Marcel</i> ドー・マベア	ロレ第5代カントン長の子息 1994.11.25
<i>Göü Geagbö</i> グウ・ゲアブ	旧ヨロレ・カントン長の子息 1989.04.18
<i>Goowasa Alphonse</i> ゴーワサ・アルフォンス	ロレ第6代カントン長 1994.11.27
<i>Kaakö</i> カーコ	古老（クーランレ） 1988.09.06
<i>Kuèmi Pascal</i> クエミ・パスカル	クーランレ第3代カントン長の元秘書 1994.11.19
<i>Lago Benoît</i> ラゴ・ブノワ	クーランレ第3代カントン長の親族 1994.11.21
<i>Le Paul</i> レ・ポール	ブロッセ第2代カントン長の孫 1994.12.07
<i>Niulè</i> ニウレ	故ゴ結社長の孫（クーランレ） 1990.03.12
<i>Tiögbodhè</i> チウボデ	ゴ結社長裁判役（クーランレ） 1988.10.16

<i>Tokpa</i> トバ	故ゴ結社長第一夫人（クーランレ）	1989.07.15
<i>Wümë Bagôgbô</i> ウム・バゴブ	ゴ結社長の親族（プロッセ）	1994.11.21
<i>Yômi Gèigbô</i> ヨミ・ゲイブ	ゴ結社長随行役（プロッセ）	1994.11.23

## II. 公文書

引用略号：ANCI（コートディヴォワール共和国国立公文書館）

- 1EE 103.04 Rapport sur la pénétration et l'occupation de la population mandé-fou du Sud du cercle de Séguéla, 1906.
- 2EE 8.09 Fiches signalétiques des chefs indigènes: 1918, 1923, 1931.
- EE 1557 Colonie de la Côte d'Ivoire, Affaires politiques administratives et sociales.  
 —Copies des décisions portant nomination des chefs de canton dans le cercle de Man  
 —Bulletin de notes des chefs de canton du cercle de Man  
 —Copies des arrêtés portant création des cantons dans le cercle de Man  
 —Décisions de suspension de solde des chefs de canton dans le cercle de Man
- .06 Bulletin individuel de notes des chefs de canton, 1938.
- .09 Décision concernant la nomination des chefs de village de subdivision de Danané, 1938.
- .12 Bulletin de notes des chefs de canton, 1941.
- .14 Bulletin de notes des chefs de canton, 1942.
- .18 Bulletin de notes des chefs de canton, 1944.
- .19 Copies des décisions portant nomination du chef de canton Lollé dans le cercle de Man, 1943.
- EE 2704 Territoire de la Côte d'Ivoire (confidentiel), cercle de Man, subdivision de Danané, Rapport politique pendant l'année 1957.
- EE 9234 Colonie de Côte d'Ivoire, subdivisions de Man, Danané, Duékoué, Sassandra, Soubré, Gagnoa, Bouaké, Séguéla, Man-kono, punitions disciplinaires 1936.

### Ⅲ. 参考文献

- 会田貞助 [1959]『熱帯産主要木材』特殊木材研究所。
- ヴァイツェッカー, リヒャルト・フォン (永井清彦 訳) [1986]『荒れ野の40年』岩波書店。
- ヴィルコムルスキー, ビンヤミン (小西悟 訳) [1997]『断片—幼少期の記憶から1939-1948』大月書店。
- セゼール, エメ (砂野幸稔 訳) [1997]「植民地主義論」(セゼール『帰郷ノート／植民地主義論』平凡社) 119～187ページ。
- 竹内幸雄 [1990]『イギリス自由貿易帝国主義』新評論。
- ヒルバーク, ラウル (望田幸男・原田一美・井上茂子 訳) [1997]『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』柏書房。
- フォルジュ, ジャン＝フランソワ (高橋武智 訳) [2000]『21世紀の子どもたちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか?』作品社。
- ヘス, ルドルフ (片岡啓治 訳) [1972]『アウシュヴィッツ収容所—所長ルドルフ・ヘスの告白遺録』サイマル出版会。
- ヘッドリック, ダニエル・R. (原田勝正・多田博一・老川慶喜 訳) [1989]『帝国の手先—ヨーロッパ膨張と技術』日本経済評論社。
- ペーレンバウム, マイケル (芝健介 監修, 石川順子・高橋宏 訳) [1996]『ホロコースト全史』創元社。
- ポドラ, ジャン＝ルイ (真島一郎訳) [1995]「アフリカから」(W・ルービン 編『20世紀美術におけるプリミティヴィズム I—「部族的」なるものと「モダン」なるものとの親縁性』吉田憲司他 日本語版監修, 淡交社) 124～175ページ。
- 真島一郎 [1991a]「秘密結社の語りにみる空間イメージ—象牙海岸, ダン族の場合」(『アフリカ研究』第38号) 55～73ページ。
- [1991b]「呪術と精霊のうずまく格闘—コートジボワール・ダン族のレスリング」(『季刊民族学』第58号) 90～95ページ。
- [1995]「コートディヴォワール最高裁長官クイ・ママドゥ氏の家系」(『アフリカレポート』第21号) 30～36ページ。
- [1997a]「ダナネ地方南部・ダン族の神話—歴史伝承群: 45の事例」(小田淳一 編『物語の発生学 I』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 119～237ページ。
- [1997b]「西大西洋中央地域 (CWA) とポロ結社の史的考察—シエラレオネ, ギニア, リベリア, コートディヴォワール」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第53号) 1～81ページ。
- [1999]「植民地統治における差異化と個体化—仏領西アフリカ・象牙海岸植

民地から」(栗本英世・井野瀬久美恵 編『植民地経験—歴史学と人類学からのアプローチ』人文書院) 97~145ページ。

—— [2000a] 「市民概念の語用とその限界—リベリア共和国から」(武内進一 編『現代アフリカの紛争—歴史と主体』アジア経済研究所) 293~353ページ。

—— [2000b] 「歴史主体の構築技術と人類学—ヴィシー政権期・仏領西アフリカにおける原住民首長の自殺事件から」(『民族学研究』第64巻第4号) 450~473ページ。

—— [2001] 「ナチ絶滅収容所とアフリカ大陸」(『清泉文苑』第18号, 2001年3月発刊予定)。

Angoulvant, Gabriel [1916] *La pacification de la Côte d'Ivoire 1908-1915: Méthodes et Résultats*, Paris: Emile Larose.

Benoist, Joseph Roger de [1982] *L'Afrique Occidentale Française de la conférence de Brazzaville (1944) à l'indépendance (1960)*, Dakar: Les Nouvelles Editions Africaines.

Comité National du Recensement (République de Côte d'Ivoire) [1988] *Recensement général de la population et de l'habitat: résultats provisoires*, Abidjan.

Deschamps, Hubert [1975] *Roi de la brousse: Mémoires d'autres Mondes*, Paris: Berger-Levrault.

d'Ollone, Charles Alexandre [1901] *Mission Hostains-d'Ollone 1898-1900: De la Côte d'Ivoire au Soudan et à la Guinée*, Paris: Librairie Hachette.

Ford, Martin Joseph [1991] *Ethnic Relations and the Transformation of Leadership among the Dan of Nimba, Liberia (ca.1900-1940)*, Ph. D. dissertation, State University of New York at Binghamton.

Kipré, Pierre [1987] *Mémorial de la Côte d'Ivoire, tome II: La Côte d'Ivoire coloniale*, Abidjan: Edition Ami Abidjan.

Lawler, Nancy [1990] "Reform and Repression under the Free French: Economic and Political Transformation in the Côte d'Ivoire, 1942-1945," *Africa*, Vol.60, No.1, pp. 88-110.

Lovejoy, Paul E. [1983] *Transformations in slavery: A history of slavery in Africa*, Cambridge: Cambridge University Press.

—— [1989] "The impact of the Atlantic slave trade on Africa: a review of the literature," *Journal of African History*, 30 (3): 365-394.

Majima, Ichiro [1997] "Voix de masque sans visage: Maania chez les Dan du Danané-Sud (Côte d'Ivoire)," in J. Kawada, ed., *Cultures sonores d'Afrique*, Tokyo: Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique, pp. 237-307.

- Ministère du Plan (République de Côte d'Ivoire) [1966] *Etude Générale de la Région de Manᄁ: Etude sociologique et démographique*, Paris: Bureau pour le Développement de la Production Agricole.
- Morgenthau, Ruth Schachter [1964] *Political Parties in French-Speaking West Africa*, Oxford: Clarendon Press.
- Mundt, Robert John [1987] *Historical Dictionary of the Ivory Coast (Côte d'Ivoire)*, Metuchen, N.J. & London: The Scarecrow Press.
- Zolberg, Aristide R. [1964] *One-Party Government in the Ivory Coast*, Princeton: Princeton University Press.

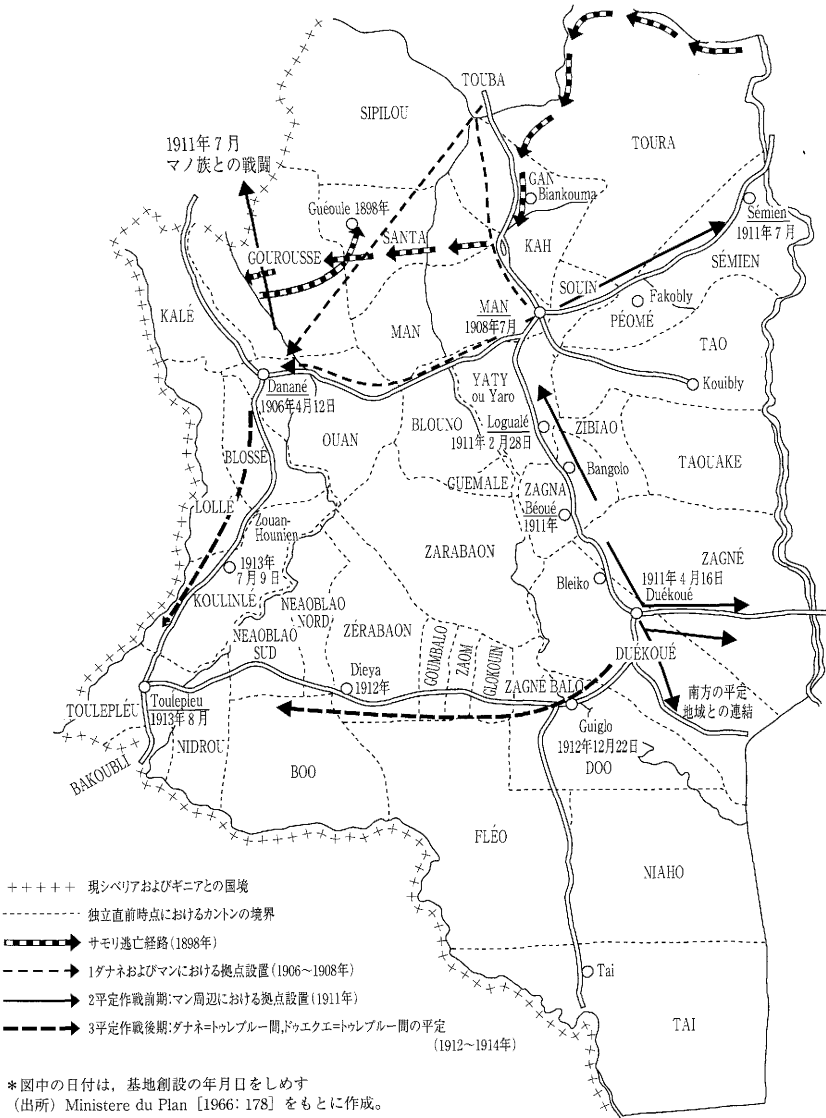
## 付録1 略年表

ダナネ地区およびマン管区		象牙海岸, 仏領西アフリカ, フランス本国	
1892.12.08	リベリアとの国境協定	1893.03.10	象牙海岸植民地創設令
		1895.06.15	仏領西アフリカ創設令
		1896.07	象牙海岸を10管区に分割する 地方令
1897	ブロンディオー第一次探査団		
1898	ジュリア第一次探査団		
1898.09.29	ゲウレ村でサモリ逮捕 (付録 2参照)		
1898	ブロンディオー第二次探査団		
1898-1899	オスタン=ドロン探査団		
1899	ウルフェル=マンジャン探査 団		
		1900	象牙海岸総督府, バンジェルヴィルへ移転
		1900.06.02	サモリ, 流刑地ガボンで死没
		1901.05.14	象牙海岸, 人頭税令
1905	ロラン中尉, 現マン市に到達	1905.10.18	フェリクス・ウフェ=ボワニ 生誕
1906.04.12	ロラン, ダナネ基地を創設		
1906	ジュリア第二次探査団 ロレ初代カントン長の任命 クーランレ初代カントン長の 任命		
1906.07	ヨロレ初代カントン長の任命		
1906.07.18	ヒトス軍曹, 戦死		
1907.09.18	リベリアとの国境協定		
		1908.05.01	アングルヴァン, 象牙海岸総 督就任
1908.07	ロラン, マン基地を創設		
1908.11	マン地方の鎮圧作戦		
1909	シュヴァリエ地理学探査団		
1910.02.09	上カヴァリエ軍管区創設令		
1911	リベリアとの国境が確定		
1911	プロッセ初代カントン長の任 命		
1912-1914	ダン居住域への本格的な平定 作戦		
1913	ロレ住民による武力抵抗		

1913.07.09	ズアン＝ウニアン基地創設	1914.08	フランス、第一次大戦に参戦
1915.05	ダン居住域の平定作戦完了	1915	象牙海岸、平定作戦をほぼ完了
		1915	象牙海岸、ロプスタ種コーヒー導入
1918	原住民首長の特徴記載カード発行		
1921.07	マン軍管区が民政へ移行	1931.09.05	象牙海岸、オートヴォルタを併合
		1934.08.10	象牙海岸総督府、アビジャンへ移転
		1934.10.10	レスト法令
1929	トンクイ山にコーヒーとキノノキの栽培試験場		
1930	シーブルック、ダナネ地方を通過		
1934	カントン再編成	1939.09.03	フランス、対独宣戦
		1940.06.14	パリ陥落
		1940.09	ダカール港砲撃事件
		1942.11	仏領西アフリカ、ドゴール支持へ転向
1943.03.19	ロレ第4代カントン長ダノ自殺	1944.01-02	ブラザヴィール会議
		1944.08.25	パリ解放
		1946-1954	インドシナ戦争
		1946.04.20	RDA創設
		1947.09.04	象牙海岸、オートヴォルタと再分離
1953	ダナネ＝トゥレブルー幹線道の建設着工		
1955.12	ウェザン・クリバリ、ダナネ遊説		
1956.01.12	フランス国民議会選挙で殺人事件発生		
1958.01.06	ダナネのカントン長全員の罷免	1960.08.07	コートディヴォワール共和国独立

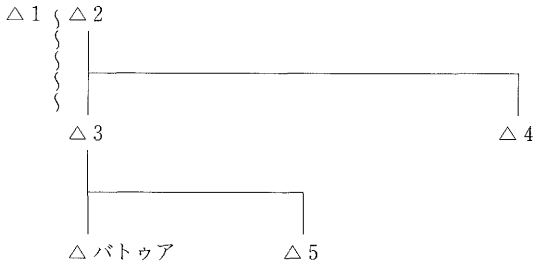


付録2 象牙海岸マン地方の平定作戦進行図 (1908~1915年)



## 付録3 ダナネ地区南部3カントンにおけるカントン長の系譜

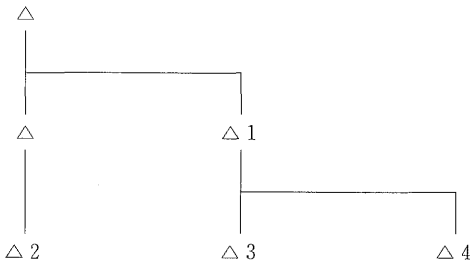
- A. ロレ Lollé (Dhoodhö) カントン長在住村：バヌー村 Banneu (Bhaündhö)  
ゴ結社長在住村：ブアグルー村 Gbouagleu (Gbuëglöö)



		推定出生年	首長任命年月日	死去年月日
1. ゲイ	(Gei Bèèdë)	?	1906	1909
2. ベアドゥウ	(Bheaduö Danogbö)	1863c	1909.05	?
3. マバア	(Mabhea Bheagbö)	1889c	1925	1934
4. ダノ	(Dano Bheagbö)	1889c	1934.08.09	1943.03.19(自殺)
5. ドー	(Doo Mabheagbö)	1915c	1943.04.14	1986.10.30

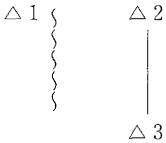
\* 初代カントン長ゲイのみは、ビアンイトゥオ村 Bianhitou (Biaan yituö) 出身者

- B. ブロッセ Blossé (Bloodhö) カントン長在住村：ゼアレ村 Zealé (Zeadhö)  
ゴ結社長在住村：トロンウニアン村  
Tronhounien (Tronwiö)



		推定出生年	首長任命年月日	死去年月日
1. ボエン	(Bhoèn)	?	1911	1914?
2. マーエケ	(Maaeke)	1880c	1914.03	1917
3. バトゥウ	(Bhatuë Bhoëngbö)	?	1917	1937.09.10
4. ゾド	(Zodo Bhoëngbö)	1883c	1933.05.19	?

- C. クーランレ Koulinlé (Klueandhö)
- カントン長在住村：クロジアレ村  
Krozialé (Kroziadhö)
- ゴ結社長在住村：クエプルー村  
Kouépleu (Kuèplöö)
- マープルー村  
Maapleu (Maaplöö)
- グアカトゥオ村  
Gouakatouo (Guaatuö)



		推定出生年	首長任命年月日	死去年月日
1. マーンドゥエ	(Maandüë)	?	1906	?
2. キアンドゥウ	(Kiandüö)	1879c	1915.09.18	1933.02
3. クイギオ	(Kuigiôgô)	1904c	1934.04.26	1985

- \* 上記系譜は、1934年のカントン再統合以前における《北クーランレ・カントン》のもの
- \* 初代カントン長マーンドゥエのみは、ピアントゥオ村Biantouo (Biantüö) 出身者
- \* 初代カントン長マーンドゥエは、1916年3月25日にリベリア側の捕虜となって以後、消息を絶った

(注) いずれもカッコ内は現地のダン語呼称を音声表記したもの

(出所) ANCI 1EE 103.04, 2EE 8.09, EE 1557.06, 09, 12, 14, 18 およびダナネ県内における聞きとり調査をもとに筆者作成。

## 付録4 象牙海岸マン管区グナネ地区長官一覧

	任期	備考
1. GAUVIN (Lt.)	1908.	
2. HUSSON (Lt.)	1910.	
3. HUMBERT (Lt.)	1911.	
4. FERRAND (Lt.)	1912.	
5. AYME (Lt.)	1913.01. - 1913.05.	
6. COVILLE (Ct.)	1913.	
7. TURQUIN (Lt.)	1913.	但しダニブルー基地 長官
8. COVILLE (Ct.)	1914. 02.	ログアレ基地へ転任
9. TURQUIN (Lt.)	1914. - 1915.	
10. BOUTILLON (Lt.)	1914. - 1915.	
11. TURQUIN (Lt.)	1916.	
12. BARAILLER (Ct.)	1917.	
13. CLERICE (Lt.)	1917.	
14. MARTY (Lt.)	1917.	但しダニブルー基地 長官
15. BARAILLER (Ct.)	1918.	
16. CLERICE (Lt.)	1918.	
17. GAUTHE (Lt.)	1919.	
18. LARIDAN (Lt.)	1919. - 1921.	トゥレブルー地区長 官兼任
19. JACOTOT (Adm.Adj.)	1921.07. - 1922.09.	
20. CANAL (Adm.Adj.)	1922.07. - 1923.11.	
21. FOURNIER (Adm.Adj.)	1923.11. - 1924.08.	
22. BUTEL (S.C.)	1924.08. - 1925.11.	
23. GODEFROY (S.C.)	1925.11. - 1926.12.	
24. VUILLAUME (S.C.)	1926.12. - 1927.01.	
25. TOUIZA (S.C.)	1927.01. - 1927.01.	
26. LELEC (S.C.)	1927.01. - 1928.05.	
27. MAILLIER (S.C.Ppal.cl.ex.)	1928.05. - 1930.05.	
28. DEVELAY (S.C.Ppal.cl.ex.)	1930.05. - 1932.05.	
29. BLAY (Adj.S.C.)	1932.06. - 1932.07.	
30. CAMAND (Adm.Adj.)	1932.03. - 1934.	
31. DUVIGNACQ (Adj.Ppal.des S.C.)	1934.02. - 1935.	
32. PALOUMET (Adm.Adj.)	1935.	
33. BELETTE (Cis.des S.C.)	1935.	

34. RAOUL (Adm.)	1935. - 1937.	
35. DULPHY (Adm.Adj.)	1937.07. - 1939.04.	
36. MONTEL (Adj.Ppal des S.C.)	1939.04. - 1940.10.	
37. DULPHY (Adm.Adj.)	1940.10. - 1941.03.	
38. TOUCHARD (Adm.Adj.)	1941.03. - 1941.10.	
39. GERVAISE (Adm.Adj.)	1941.10. - 1943.05.	
40. BATTISTI Ph. (Adj.des S.C.)	1943.05. - 1946.07.	
41. GAUDAUVILLE (Adj.des S.C.)	1946.07. - 1946.07.	
42. BRUTINEL (Adm.Adj.)	1946.07. - 1947.03.	将軍の子息
43. V.JACQUOT (Adm.3eme cl.)	1947.03. - 1947.06.	
44. P.CHENAL (Adm.2eme cl.)	1947.08. - 1947.09.	
45. C.BRUTLEIN (Adm.2eme cl.)	1947.09. - 1947.11.	
46. P.CHENAL (Adm.2eme cl.)	1947.11. - 1949.06.	
47. J.-P.OTTAVY (Adm.2eme cl.)	1949.06. - 1951.09.	
48. J.BRUGNOT (Adm.)	1951.09. - 1953.10.	
49. Y.NICOL (Adm.)	1953.10. - 1953.12.	植民地総督の子息
50. J.BRUGNOT (Adm.)	1953.12. - 1954.12.	トゥレプルー地区長 官兼任
51. G.VERNHET (Adm.Adj.)	1954.12. - 1955.01.	
52. Y.de DARUVAR (Adm.)	1955.01. - 1955.09.	
53. J.PICHARDIE (Insp.Ppal G.I.)	1955.09. - 1958 ?	

(出所) ANCI EE2704 その他の未公開資料をもとに筆者作成。

## 付録5 象牙海岸植民地総督一覧

	任期
1. Louis-Gustave BINGER	1893.03.20. - 1895.
2. Pierre Hubert August PASCAL	1895. - 1896.02.
3. Eugène BERTIN	1896.02.25. - 1896.05.13.
4. Louis MOUTTET	1896.05.14. - 1898.
5. Adrien Jules Jean BONHOURE	1898. - 1899.
6. Pierre Paul Marie CAPEST	1899. - 1899.
7. Henri Charles ROBERDEAU	1899. - 1902.11.
<u>Albert Anatole NEBOUT</u>	1902.11.05. - 1902.11.25.
8. François Joseph CLOZEL	1902.11.25. - 1907.08.
<u>Emile MERWART</u>	1904.07.17. - 1905.01.06.
<u>Albert Anatole NEBOUT</u>	1905.11.19. - 1906.10.27.
	1907.08.15. - 1908.02.
9. Louis Gabriel ANGOULVANT	1908.05.01. - 1916.
<u>Pierre BRUN</u>	1909.06.28. - 1909.08.
<u>Casimir Joseph GUYOP</u>	1911.05.12. - 1912.03.09.
	1913.05.22. - 1913.10.29.
<u>Henri Jacques JULIEN</u>	1913.10.29. - 1914.09.04.
10. Maurice Pierre LAPALUD	1916.06.16. - 1918.01.
11. Raphaël Valentin ANTONETTI	1918.01. - 1924.08.
<u>Maurice BEURNIER</u>	1919.06. - 1919.09.22.
<u>Pierre Amable CHAPON</u>	1922.01.24. - 1922.09.28.
<u>Richard Edmond BRUNOT</u>	1924.04.02. - 1924.08.23.
<u>Jules REPIQUET</u>	1924.08.23. - 1924.12.06.
12. Richard Edmond BRUNOT	1924. - 1925.
13. Maurice Pierre LAPALUD	1925. - 1930.
<u>Maurice Léon BOURGINE</u>	1927.05.20. - 1928.03.
14. Jules BREVIE	1930.08.25. - 1931.
<u>Jean-Paul BOUTONNET</u>	1930.10.28. -
15. Dieudonné-François RESTE	1931.01.16. - 1935.
<u>Raoul Joseph BOURGINE</u>	1931.03.03. - 1932.12.28.
<u>Marie A.Flotte de POUZOLS</u>	1935.05.07. -
16. Adolphe DEITTE	1935.06.28. - 1936.
<u>Georges LAMY</u>	1936.05.07. -
17. Gaston Charles Julien MONDON	1936.11.28. - 1939.
<u>Louis BRESSOLLES</u>	1938.07.16. -
18. Horace Valentin CROCICCHIA	1939.01.27. - 1941.

19. Hubert DESCHAMPS	1941.01.23. - 1942.
20. Georges Pierre REY	1942.09.29. - 1943.
<u>Jean-François TOBY</u>	1943.08.03. -
21. André LATRILLE	1943.08.26. - 1947.
<u>Henri Jean-Marie de MAUDUIT</u>	1945.08.14. - 1946.04.
22. Oswald DURAND	1947.05.20. - 1948.
23. Georges ORSELLI	1948.01.29. - 1948.
24. Laurent PECHOUX	1948.11.10. - 1952.
<u>Lucien GEAY</u>	1951.04.13. -
25. Pierre PELIEU	1952.04.25. - 1952.06.27.
26. Camille BAILLY	1952.07.10. - 1954.
27. Pierre MESSMER	1954.02.19. - 1956.
28. Pierre LAMI	1956.05.28. - 1957.
29. Ernest de NATTES	1957.02.23. - 1959. (1958年より高等弁務官)
30. Yves GUENA	1959.07.15. - 1960. (高等弁務官)

(注) 下線は臨時代行総督をしめす

(出所) Benoist [1982: 509-510], Kipré [1987: 44, 290], Mundt [1987: 74-75] をもとに筆者作成。